平成26年1月1日
防衛大学校同窓会機関誌
Vol.21

小原台だより

第61期生　入校式

同窓会ホームページ URL：http://www.bodaidsk.com/

CONTENTS

■26年新春の言葉 …… 3

■学校長に聞く
すべては学生のために…… 4

■新幹事に聞く
一粒の種…… 5

■新訓練部長に聞く
四半世紀振りの小原台…… 6

■人文社会科学群長に聞く
武藤学群長！？…… 7

■校友会活動（運動系・文化系）…… 8

■会長対談集
國分良成学校長との対談…… 11
幹事 田邉揮司良 陸将との対談 …… 14

■同窓生アラカルト
吉田茂元総理の「小原台」草稿…… 16
機械1班の宝 24冊余のエッセー集 …… 19
復興に命をかける「村井嘉浩氏」宮城県知事選で3選 …… 20
バイク＆車で定年後も大いに楽しむ …… 21

■今人生、男盛り
終わりなき「剣の道」を求めて…… 23
ドックマスターとして…… 24
独立系FPとして皆様のライフプラン創りをお手伝い… 26

■防大57期生に聞く
覚　悟…… 29
やせ我慢…… 30
幹部候補生学校に入校して…… 32

■同窓会事業
防衛大学校留学生のホストファミリー募集案内…… 33
ホストファミリーとの交流を振り返って…… 34
協力家庭との交流…… 35
お母さん…… 36
感　謝…… 37
協力家庭の交流…… 38
Mさんと猫と私の交流 …… 39
第12回防衛大学校同窓会囲碁大会（個人戦）結果 …… 39

■連絡事項等
平成24年度防衛大学校同窓会決算書 …… 40
会費納入状況、会費納入のお願い…… 41
機関誌「小原台だより」投稿のお願い…… 42
機関誌「小原台だより」の配布部数縮減に対する協力について… 42
同窓会名簿管理に関するお知らせ…… 43
期生会会長・代議員名簿…… 44
同窓会本部・支部等の役員紹介…… 45
会員の訃報…… 46

迎春 26年新春の言葉

防衛大学校同窓会長
永岩　俊道
（15期・航空）

平成25年3月17日、安倍首相は防衛大学校の卒業式において、「我が国の領土、領海、領空に対する挑発が続いています。諸君がこれから臨む現場で起きていることは、冷厳な現実であり、『今、そこにある危機』であります」と訓示しました。また平成25年10月27日、自衛隊の観閲式において安倍首相はその訓示において「力による現状変更は許さないとの確固たる国家意思を示す」と述べるとともに、「『防衛力は、その存在だけで抑止力になる』という従来の発想は、完全に捨て去ってもらわないといけない」と強調しました。

日本周辺海空域における中国の最近の活動は急速に恣意的かつ過激化しており、まさに一触即発の緊張状態が続いていると言っても過言ではありません。朝鮮半島においては、北朝鮮が核実験や人工衛星と称するミサイルの発射を繰り返す等、無謀な行為や挑発的な瀬戸際外交を継続してきており、周辺地域にとって深刻な懸念となっています。

一方、日本の同盟国である米国は、米国内の厳しい財政状況等を背景に、米国の言ういわゆる「リバランス」が当該地域に維持・再構築できるかは極めて微妙な状況になりつつあり、状況によっては、当該地域が一気に不安定化する恐れがあります。

そのような中、昨年11月の開校祭の際、防大生の選んだテーマは「SUCCEED」という言葉でした。「伝統を粛々と継承し、将来の成功を誓う」ということだったのでしょう。よくぞ時宜に適した的確なキーワードを選定してくれたと敬意と確かな期待を感じました。防大生達は、先輩達の生き様や逞しい後ろ姿を真剣に見据えています。同窓生の一員として、先輩の志を必死で継承しようとする後輩諸官の健気な姿には愛おしさすら感じた次第です。最前線の現役同窓生にとっても、次なる時代の作戦環境は、先輩諸官の時代よりもっともっと厳しいものになる恐れがあります。しかし、先輩諸官が開拓者精神で挑戦してきたのと同様の熱き情熱で、現役同窓生は、国民の付託に答え、崇高な使命に勇敢に立ち向かってくれるであろうことを確信しています。

國分学校長のご指導は、「さらなる高見を目指した努力を」とのことですが、時代の変化に適合すべく、同窓会も「SUCCEED」の精神を尊重しようと考えています。つまり、「伝統を粛々と継承しつつ、変わる勇気、変える決意を持とう」という事であります。「伝統の継承」はともかく、「変えるべきが何か」は幾多の考え方があろうと思いますが、皆様と骨太の議論を交わしながら諸々の活動を積極的に推進して行きたいと考えています。

まず、考えていますのは、既に現役を退官された同窓生の皆様の経験や知的財産を如何にして後輩に伝えるか、社会還元できないものかということです。30有余年に亘る同窓生の経験や知見は我が国の安全保障に係わる貴重な国家的財産です。後輩諸官に逞しい背中を見せることは勿論ですが、東シナ海に波風の立つ今こそ、国民の安全保障意識高揚のため、これら財産の有効活用が望まれているのであろうと考えます。現在、これらの財産（まさに防大及び防大生の歴史そのもの）を防衛大学校内のいずれかの場所（仮称：メモリアルホール）に集積・展示出来ないか、或は、先輩方の諸々の財産のデータベースを同窓会ホームページで紹介できないかと模索中です。ホームページのリニューアルを含め、これらの活動は同窓会活動を活性化させる起爆剤にもなろうと考えています。宜しくご確認・ご協力ください。皆様のご指導・ご意見を宜しくお願いしたいと存じます。

すべては学生のために

防衛大学校学校長
國分　良成

防衛大学校長室は本庁舎の2階にある。この部屋には広い窓があり、ここから四季折々の樹木や花を目にすることができる。新緑と紅葉のシーズンが美しいのは言うまでもないが、冬枯れの季節も風情がある。ここからは浦賀水道を眺めることもできる。青く輝く海原の向こう岸には房総半島の鋸山が見える。東京湾に出入りするすべての船舶が浦賀水道を通過する。

ペリー率いる米国の黒船がこの浦賀に来航したのが1853年、それから160年という時間が経過した。世界の日本への関心と、日本の世界への旅立ちはまさにこの地から始まった。そんなことに想いをめぐらしながら、しばしば学校長室の窓から行き交う船を眺めている。学生時代を入れると、40年近くにわたって、人混みをかき分けて都心の真ん中に通い続け、東京タワーと高層ビルを眺めて暮らした日々からすると、小原台から見える風景は心に染み入る。

そうした至福の瞬間にしばし浸っていると、突然に学生たちが課業行進で「一・二、一・二」と大きな掛け声を出しながら眼下を過ぎてゆく。その次の瞬間、「ああ、私はいま防衛大学校長なのだ」と、はっと我に返る。この小原台には、2000名弱の学生と総勢750名に及ぶ教官、事務官、自衛官が日夜職務に精励している。自分自身がその頂点にいるのだと考えると、不思議な身持ちになるが、自然と背筋もピンと伸びる。

学校長室の隣には応接室があり、そこには歴代学校長の写真が掲げられている。私は第9代学校長である。この部屋に入り、第1代槇学校長から第8代五百籏頭学校長までの写真を仰ぎ見るたびに、歴史の重みと自身の非力を感じる。しかし結局のところ、自分は自分でしかない。「國分学校長」のスタイルをどう確立するか、自身で悩み、模索するしかない。しかし、私は孤独ではない。サポートしてくれる副校長、幹事をはじめ、信頼できる多くの「仲間」がいるからである。

防衛大学校長に着任してから、すでに1年8カ月が過ぎた。「学校長」という呼称に敏感に反応するようになったのは、1年を過ぎた頃からではないかと思う。おそらく周りのスタッフが私を自然に「学校長」と呼ぶようになったのも、やはり1年を過ぎた頃からではないかと思う。人事異動がひっきりなしに行われる防衛省・自衛隊の感覚からすれば、1年8カ月も経てば超ベテランだと思うかもしれない。しかし、それは防衛省・自衛隊の感覚を熟知した人間の話である。私にはすべてが新鮮に映る。まったく異なる組織にいた私がこのポストに任命されたことの意味は、慣れることよりも、むしろ新鮮な感覚を維持し続けることなのかもしれないと思う。

他人からよく趣味を尋ねられる。映画鑑賞や読書など、人並みなことを言ってごまかすことも多いが、正直にいうと、一般的な意味での趣味を思いつかない。ゴルフもテニスもやらない。一面では、専門の中国研究が私の趣味かもしれない。しかし本音を言うと、私の趣味は「研究」ではなくて、「学生」である。一般私大の教員としての30年間、「学生」は仕事の対象でもあったが、趣味でもあった。

それは、若者に特有な純粋さやひたむきさや、社会化されていない原石の個性に魅力を感じるからである。しかも若者はかれらの短い過去を振り返るより、広がる未来に関心がある。かれらこそが将来の国家や社会の礎であり、かれらをいかに教育するかで国家と社会の将来も決まる。未来を創造する作業が教育なのである。卒業後も以前の私大の多くの卒業生たちと交流を続けている。かれらのその後のさまざまな人生を見守ること、これは教師だけが味わえる最大の醍醐味である。人を育てることは、難しいが、実に楽しい。

他者から見れば、一般大学と防大との違いが気になるようだが、私にとっては「学生」という部分で共通している。もちろん学生生活の質は大きく異なるが、同じ若者である。しかも防衛大学校での教育は、一般大学に比べ、将来の国家と社会の命運により直接的につながる。防大での教育は、日本を守り、国民の安全と平和を守る自衛隊の要諦を育成するということであり、20年、30年後の日本をどう描くかという問題意識に直結しているのである。そうした点で、私の「趣味」はさらに深化しているのかもしれない。

防衛大学校長2年目を終えるにあたって、着任時の私の想いは確信に変わりつつある。防大の目的はただ一つ。それは「すべては学生のために」である。ここには教官、事務官、自衛官がいて、さらにそれは理系・文系の教官、防衛省の各セクションの事務官、陸・海・空の自衛官と分化していく。しかし、われわれの目線の先にはいつも学生がいる。要は、そうした大きな視点を失わないことである。

一粒の種

防衛大学校幹事
陸将　岡部　俊哉（25期・陸上）

かつて楕円球をひたすら追い駆け、「♪小原の岡部（丘辺）！」と息巻いていた未熟者が、30余年振りに小原台に立つことになり、今更ながら防衛大学校の伝統の重さと諸先輩方の熱い思いをひしひしと感じている次第である。

母校の職員として着任するに当たり思い描いたのが、越川春樹先生と「一粒の種」である。大原幽学研究の第一人者でもある越川先生は、昭和36年から12年間に渡り、千葉県船橋市立二宮中学校長として奉職された教育者である。当時の荒んだ学校・教育に対し、「心づくり、学力づくり、体力づくり、環境づくり」を4本の柱として長期計画を策定、同校職員一同の日教組脱退を含め様々な教育改革に取り組まれ、同校をして県下の代表校のみならず全国の模範校と言われる迄に育て上げられた。二宮中学校の校舎玄関前には、「一粒の種　一寸の苗　十年の　百年の後　深く培う」と銘打った碑がある。これは、「今、教えている子供たちは一粒のたね、一寸の苗のようなものであるが、十年二十年何十年の後には、一家を、一郷を、そしてあらゆる職場において日本を背負って立つ大人になるのだ。将来、大きく成長するため、今、大事に教え育てて行こう」（「一隅を照らす」越川春樹著）を同校の教育の根本精神とし、それを教育碑として越川先生が当時建立されたものである。

書籍で故越川先生を知った私は、勤務地が近傍になった折、先生の足跡を辿るべく、二宮中学校訪問、先生の御息女・同校の元教諭・教え子の方にまで面談させて頂いた。爾来、私自身が教育職・教育に携わる機会には、「一粒の種」を座右に置くべく考えていたものであった。

創立61周年の防衛大学校は、本年還暦を迎えられた國分良成学校長のもと、情熱を燃やして教育・研究に取り組んでいる。特に文化と教養そして国際感覚を身に付けた人材を育成すべく、「防衛大学校の新たな高み」へ向けた挑戦・施策を推進しているところである。更に國分学校長は事ある毎に、「学生の為（学生を全ての最優先に置く）」及び「将来の日本の為に」を繰り返し指導され、自らも率先して実践されている。私の着任申告時においてもこれを訓示され、「一粒の種」を念頭にその場に臨んだ私としては、正に我が意を得たかの心境であり、また折々の御指導を頂く度に意を強くしている次第である。

防衛大学校においては、槇智雄初代学校長からの建学の精神、廉恥・真勇・礼節を標語とする学生綱領、「教育・訓練、学生舎生活、校友会活動」の3本柱等は不変の伝統として脈々と継承されている。一方で、時代、様々な社会環境・ニーズの変化等に応じ、学校の任務、伝統等との節調を図りつつ、学校組織、各種制度・規則、教育・研究態勢、教育・訓練要領等について、大規模或いは小規模の改革・改善を繰り返し現在に至っている。これらその時々に応じた変化・足跡は、悩み、心血を注いで学生教育に努められた先輩職員の方々の情熱の表れでもある。そしてこれら改革・改善の流れを受け、今の防衛大学校職員についても学生に対し、如何に幹部自衛官となるべき者としての志を確立させるか、如何に防衛大学校学生としての誇りを堅持させるか、如何に自主自律を実践させるか、如何に資質・識能の向上意欲を振起させるか等、日々懸命に取り組んでいるところである。

越川先生の恩師で、「一粒の種」の作・揮毫者である菅原兵治先生が、「立志（志の確立）は外部より強いるものでなく、自己の本心より発したものでなくてはならぬ。この「立志」こそが「学」の原動力であり、その志さえ立てば、学ばずにはおれなくなるものである。教学の要はこの志を立てしめることである。そしてそれは、志を立てて精進している師友の恩益によることが大きい。」と、著書「佐藤一斎の言葉―『言志四録』を生きる」で述べておられる。思えば、我々防衛大学校卒業生もかつての一粒の種・一寸の苗として、ここ小原台で培われてきたもの。そういった観点からは、将来ある若い職員が、更に大きく成長を続ける若い苗である事は勿論のこと、私自身は苗とは言えずとも、また枯れかかり止まりかかってはいるが、未だ成長の途上にあると言える。自分自身教える側に立ち、いつの間にか、自己の拙い経験・知識のみを頼りに、教育・指導の名のもと、学生に対する上からの押しつけ或いは節介に陥っている事に気付く。心構えによっては日常起居全てが勉強と言われるが、ここ防衛大学校（母校）に職員として勤務させて頂く我々が、この与えられた機会にしっかりと志を立て、その上で学生と共に学びかつ教え、感化し感化され、自らも培うことを忘れずに精進する。これこそが菅原・越川両先生の教えであり、所謂「一粒の種」ではないだろうか。

正に言うは易く行うは難しではあるが、大仰に構えることもなく、まずは我々職員自らの日常における躾・習慣、学習等小さな志の確立と実践が、國分学校長が指導されている「防衛大学校の新たな高み」への挑戦の第一歩であり、防衛大学校建学の精神を体現し、なおかつ新しい英風を呼び込むものと信ずる。

四半世紀振りの小原台

防衛大学校訓練部長
海将補　伊藤　弘（32期・海上）

昭和最後の卒業生である私は、平成25年の夏、第39代訓練部長として四半世紀振りに小原台に戻りました。歴代訓練部長の中でもとりわけ若造の自分がどれだけ後進の育成に寄与できるのかと自問自答しながら防大坂を登ったのがつい昨日のことのように思い出されます。

着任してみると、こけら落としが終了したばかりの新学生食堂は勿論のこと、本館、新学生舎、記念講堂、新時計台等々、各種施設の整備には目を見張るものがあります。教場の建て替え、現在ラグビー場のみ完成している各グラウンドの人工芝化等まだまだ先は長いものがありますが、現在6号舎裏にある仮設の浴場が旧学生食堂跡地に完成すれば、施設整備も一段落と言えるでしょうか。

さて、着任直後、私は学生たちに対し要望事項として次のフレーズを掲げました。それは、“洗練されたフォロワーシップを追求せよ”というものです。防大生活において学生達は、とかく“リーダーシップの涵養”が求められるわけですが、実態として4学年に至るまでの多くの時間において、そして4学年に進級しても同期の学生長、様々なイベントの実行委員長等を支える立場でフォロワーシップの発揮が求められます。これは幹部自衛官に任官後も同様であり、それぞれのキャリアパスの中で、その節目節目において指揮官等として勤務することはありますが、その他の多くの時間をフォロワーとして過ごすこととなります。そのフォロワーでいる間に、積極的に上位指揮官、上司等の意を体することによりフォロワーシップを洗練することが、リーダーとなった際に大いなる糧になるということを意図して、敢えてリーダーシップとは言わず、その逆説性に訴えることとしました。

一方、訓練部職員には、次の2点を掲げました。その1点目は「伝統の継承」です。これは、ややもすれば「伝統墨守」、つまり、取り敢えず何でも今あるものは変えない、というネガティブ思考に捉えられがちですが、悪しきもの、変えるべきものは変えていきます。一方で変えてはならないもの、もう少し様子を見るべきものは変えません。その判断の軸足は、あくまで、より良い組織、つまりより良い防衛省・自衛隊を後輩につなぐ、という点にあります。我々訓練部に与えられた主任務である学生教育、後進の育成は、その根幹をなすものではないでしょうか。

2点目は「変化への挑戦」です。世間一般的な視点に立てば、変化には「対応」することが多いのではないでしょうか。この「対応」は受動的であることが多いように思います。「変化への挑戦」は、言葉を換えれば、各種情勢の変化に能動的に取り組もうというものです。1点目において述べた伝統の中で、変えるべきものの多くはこの情勢の変化から来ていると思います。

このようにいささか構えた方針事項を示したものの、実際勤務を始めて、職員一人一人と会話を交わしてみると、32期生の部長を始めとする古参の職員から最も若い小隊指導官の54期生まで、一般大学等出身者も含め、陸海空自衛官等約180名の職員のバックグラウンドが、人それぞれかなり異なることにあらためて気付きました。それぞれが学生時受けた指導は、学生舎における部屋編成、学生間指導と指導官指導の相対的な位置付けの違いなど、様々であり、彼らのベクトルを一致させることはそう容易ではないことも認識しました。さらに、約1900名の学生を訓練部長が直接一人一人指導することは勿論叶いません。訓練部長の役目は、学生を導く指導官を始めとした職員が迷った時にその方向性を指し示す灯台のようなものであり、また、そうあれたらと考えています。

これまで訓練部長としての“思い”を徒然に書き綴らせて頂きました。他方、卒業とほぼ時を同じくして東西冷戦が終結したことを始め、その後の国内外情勢、特に安全保障環境の変化には並々ならぬものがありました。湾岸戦争後には、ペルシャ湾への掃海艇派遣、カンボジアへのPKO派遣と自衛隊の海外派遣が実質的な第一歩を踏み出しました。また、Low Intensity Conflict、Military Operation Other Than War等の用語が注目を浴び、国家はもう必要ないとの主張も大手を振っていた時期もありました。しかしながら、9.11以降、国家の位置付けが再確認されるとともに、テロ特措法、イラク特措法の成立を受け、海外派遣はより本格的なものとなりました。2010年代に入り、海賊対処活動が開始され、東日本大震災への対応等、自らの卒業時には想像だにできなかった環境下で我々は勤務することとなっています。

今、小原台に集う学生達が自衛隊を、そして我が国を支える主体となる20年から30年後の我が国周辺、そして国際安全保障環境はどのようなものになっているでしょうか。21世紀前半のこの時期に、防衛大学校訓練部長として勤務する機会を頂いた身として、このような我が国を取り巻く情勢の変化に果敢に挑戦するとともに、守るべき伝統はしっかり継承できる次世代を担うことのできる後進の育成に全力を傾注して参りたいと我が意をあらたにしています。

武藤学群長！？

人文社会科学群長
武藤　功

平成25年4月より、人文社会科学群長に就いた。公共政策学科長を2期4年務め終えたばかりで休む暇がない。そのこともあってか、4月から暫くは、特段の実感もなかった。実感がわかなかったのには、他にも理由がある。実はこの8月まで、武藤茂樹空将補が防衛学群長を務めておられた。短い間ではあったが、学群長会議等の学内の会議でご一緒させていただいた。学内では、武藤学群長と言えば防衛学群長のこと、というのが常識。だから会議の途中で委員長が「武藤学群長、何か意見は？」と尋ねられたときに、私などが答えようとしたら大変なことになる。場の空気を読んで、私は会議中黙って俯いていることになる。自分で自分を学群長ではないと思いこませようとさえしていた。だから学群運営に思いを巡らしたのは、ようやく最近になってからのこと。自分でもお粗末だったと反省している。

私は、社会科学教室管理学科の経済学担当教官として、平成4年4月に赴任した。それから時を重ねて20年。管理学科は、平成12年に公共政策学科と改称。また、人間文化学科が専門課程として新設された。これに国際関係学科を加えた3学科が人文社会科学群の中に配置されることになった。学群制度の導入に伴い、人間文化学科が教務1班、公共政策学科が教務2班、国際関係学科が教務3班となった。それ以前は、管理学科が教務15班、国際関係学科が教務16班だったから、随分と付いて回る数字が軽くなった。理工系教官の中には、このことに不満をもっている人がいるらしいのだが、プロ野球選手の背番号ではないのだから、数字が小さくなったとしてもあまり深い意味はない（はず）である。

さて、20年勤めて見えてきたものも多いが、いまだに分からないことも多い。その意味では、皮相的な雑感に過ぎぬが、教育についての私見を率直に開陳しておきたい。

どう公平に考えても防大生の勉学意欲は十分とは思えない。なぜ十分でないのか？「授業が面白くないから」。そうかもしれぬ。しかし、授業は漫談ではない。その類の面白さを学生が求めているとしたら、それは筋違いである。人社系にせよ理工系にせよ教官が講ずるのは、いずれも長い歳月を費やして築きあげられてきた体系的学問である。だから安直に理解でき、その面白さが分かるものかと問われれば、それは甚だ難しいと答えざるをえない。元来勉学の面においても、実は辛抱して耐えねばならない時間の方がはるかに長い。いくら鋭利な頭脳に恵まれた人でも、この我慢がないと結局は何もつかめずに終わってしまう。勉強というのも、砂を噛むような努力をしたあとに急にトンネルをぬけて視界が広がる瞬間がある。その時に初めて、学問の真の面白さが分かるのである。

防大の講義で得た知識が、実社会でそのまますぐに役立つなどとは到底考えられない。いつになっても必要に応じて必要な知識を身につけていかねばならない。それは皆同じである。新しい知識が必要になったら、ゆっくりと腰をあげれば十分だとも言える。だとすると、なぜ学生時代に真剣に勉学に取り組まなければならないのか。私の答えはこうである。それは、ものの道理を厳密に考え、どんな立論をするにせよ、それを支える峻厳な論理を尊重する気風を、四年間の勉学を通して涵養するためである。学問にせよスポーツにせよ、基礎をかため、妥協のない本格の鍛錬をつうじて初めて獲得しうる、厳しい精神的資質の涵養こそ、私は四年間の最も大切な教育目標だと考えている。「研究者になるわけではないから」。それは承知している。しかし、物事を秩序立てて考えるというトレーニングを真面目に積み重ねた学生と、そうでなかった学生とは、ことに処する態度において必ずや大きな差が生ずるであろうと信じている。近年、緻密に推理を重ねていく強靭な知力の鍛錬が軽んじられ、学生にもその大切さを説かぬばかりか、まるで苦もなく学問を習得しうるかのごとき錯覚を抱かしめる傾向が目につく。このことを、私は極めて残念に思っている。

校友会活動には熱心に取り組むべきである。そう、学生時代にしかできないから。同じく、勉学の面においても学生時代にしかできないことがある。学生諸君には、そのことに気づいて欲しい。そのために我々は何をすべきなのか。私は思い切って教えるメニューを絞り込むことだと思う。厳選した科目を教官も学生も、時間をかけてじっくりと取り組む。落ち着きなくあれやこれやと手を出すのは愚の骨頂であり、つまるところ時間の無駄であろう。防大生は、ただでさえ時間がない。多くの科目を表面だけ齧っても、消化不良を起こすだけである。

時代は大きく変わりつつあり、伝統的な学問では十分に答えられない新たな問題も出てきている。これは確かである。しかしだからといって、すぐさま新たな学問分野を創りだし、それを学生に講ずることが果たして賢明な対処法なのか。甚だ疑問である。

平成25年度前期校友会活動主要成果及び部員状況

校友会名	部員数	活動状況
校友会代議員会	37名	○代議員会の実施 ○校友会予算の見直し
校友会学生員会	19名	○文化部合同発表会の実施 ○運動部紹介行事の実施
儀仗隊	52名	○入校式における儀仗及びドリル展示 ○月例観閲式でのドリル展示 ○自衛隊音楽まつり参加 ○久里浜、北富士、座間、立川、土浦駐屯地記念日行事参加
応援団リーダー部	13名	○少林寺拳法部、相撲部、短艇委員会、ハンドボール部、レスリング部への壮行会 ○硬式野球部、準硬式野球部、相撲部、短艇委員会、フィールドホッケー部、ボート部の大会等の応援 ○文化部合同発表会における演舞披露
柔道部	48名	○神奈川県学生柔道春季大会 ・男子団体準優勝　団体女子第3位 ・男子個人軽・中量級準決勝敗退 ○関東学生柔道優勝大会　男子団体準決勝敗退 ○神奈川県学生柔道ジュニア体重選手権大会 ・66kg級第4位：242(3)山本
剣道部	62名	○第59回春季関東理工科系学生剣道選手権大会 ・男子団体第3位 ・女子個人準優勝：412(3)持丸 ○第58回春季神奈川県学生剣道選手権大会 ・女子個人準優勝：412(3)持丸
空手道部	46名	○春季関東学生会定期リーグ戦 ・男子1部第5位 ・女子2部優勝(1部昇格) ○第57回横須賀春季空手道大会 ・男子形優勝：442(4)間中 敢闘賞：112(3)大野　442(3)古川 ・男子組手A敢闘賞：223(1)鹿江 ○全自衛隊空手道選手権 ・組手団体第3位：防大A ・形個人敢闘賞：442(4)間中
銃剣道部	52名	○全日本成年銃剣道大会　個人女子第3位：243(4)西田 ○全日本銃剣道優勝大会 ・一般1部優勝：神奈川銃剣道連盟(中堅：321(4)福原)
合気道部	57名	○全日本合気道演武大会参加 ○全国学生合気道演武大会参加 ○全国自衛隊演武大会参加
相撲部	14名	○全国国公立大学対抗相撲大会 ・団体戦第3位 ・新人戦第3位：223(1)トゥフシンバヤル ○東日本学生相撲選手権大会　団体戦Cリーグ第3位
居合道部	12名	○第32回無双直博英信流居合道大会 ・二段の部優勝：242(3)神水 準優勝：312(3)酒井 第3位：341(3)片岡 ・初段の部優勝：441(2)山根 準優勝：312(2)黒木 第3位：431(2)大塚

校友会名	部員数	活動状況
弓道部	37名	○全大学弓道選抜大会関東地区予選会 ・団体予選通過　個人予選通過：432(3)原口 ○全関東学生弓道選手権大会個人予選会団体戦 ・決勝戦3回戦敗退 ○関東学生弓道選手権春季トーナメント大会 ・全国大学弓道選抜大会出場権獲得
少林寺拳法部	75名	○関東学生少林寺拳法大会 ・団体演武第3位 ・2段以上第4位 ○神奈川県少林寺拳法大会 ・団体演武最優秀 ・一般男子級拳士最優秀・優良賞 ・一般男子三段以上最優秀・優秀・優良賞 ・一般男子二段以上優秀賞 ・一般男女有段優秀賞 ・一般男子初段優秀賞 ○全日本少林寺拳法大会　団体演武優良賞
バスケットボール部（男子）	39名	○神奈川学生バスケットボール春季リーグ戦 ・団体2部優勝　最優秀選手賞：323(3)冨永 優秀選手賞：311(4)吉口 ○神奈川学生バスケットボール春季リーグ入れ替え戦 ・2部敗北(2部残留)
バスケットボール部（女子）	5名	○神奈川学生バスケットボール春季リーグ入れ替え戦 ・2部敗北(2部残留)
ラグビー部	128名	○京都大学、東京大学、筑波大学、防衛医科大学校との定期戦 ○関東学生3部リーグにて昇部を目標
サッカー部	49名	○神奈川県大学サッカー春季リーグ戦　第5位 ○横須賀サッカー三浦半島リーグ戦　2部優勝 ○横須賀市民大会　6戦5勝1敗
バレーボール部(男子)	34名	○関東大学バレーボール春季リーグ戦　5部第9位 ○神奈川県大学バレーボールリーグ戦　2部第5位
バレーボール部(女子)	21名	○関東大学バレーボール春季リーグ　7部第3位 ○神奈川県大学バレーボールリーグ戦　2部第3位
卓球部	15名	○関東学生卓球春季リーグ戦　男子5部B第4位
陸上競技部	115名	○第92回関東学生陸上競技対校選手権大会 ・2部砲丸投第2位：141(4)秋島　第3位：431(3)工藤 ○第68回横須賀市陸上競技対校選手権大会 兼　三浦半島陸上競技大会 ・100m　第3位：131(4)渡邊 ・400m　第1位：342(4)八谷　第2位：442(4)加太 第3位：321(3)中野 ・800m　第1位：342(4)八谷　第2位：442(4)加太 ・110mH　第2位：411(3)安田 ・3,000mSC　第2位：232(3)古屋　第2位：423(3)中西 ・棒高跳　第2位：332(4)鈴木 ・走幅跳　第2位：332(4)鈴木 ・砲丸投　第1位：431(3)工藤　第2位：111(4)飯田 ・円盤投　第1位：431(3)工藤　第2位：111(4)飯田 ・やり投　第1位：322(2)岡藤 ○第68回神奈川陸上競技選手権大会 ・800m　第3位：342(4)八谷　第6位：442(4)加太 ・3,000mSC　第2位：341(4)可児

平成25年度前期校友会活動主要成果及び部員状況

校友会名	部員数	活動状況
硬式庭球部	64名	○会長杯テニス選手権大会 ・個人Bクラスブロック優勝：442(3)吉田 ・個人Cクラスブロック優勝：211(4)石津　341(2)畑 ○全自衛隊テニス大会関東地区大会(松原杯) ・個人予選第1位：442(3)吉田 ○全自衛隊テニス大会団体戦予選　団体第5位 ○平成25年度省内ダブルス大会 ・ダブルス個人優勝：442(3)吉田・白石1尉ペア
硬式野球部	68名	○神奈川大学野球春季リーグ戦2部　第5位 ○神奈川大学野球新人戦参加
射撃部	18名	○関東学生ライフル射撃選手権春季大会 ・10mライフル立射60発競技団体　第10位 ・総合団体2部　第4位 ・関東学生DP大会個人　第3位：312(4)前川 ○関東学生ライフル射撃選手権秋季大会予選会 ・個人第3位：132(3)奥田
水泳部（競泳）	28名	○関東学生春季公認記録会参加 ○東部地区国公立大学選手権水泳競技大会参加 ○全国国公立大学選手権水泳競技大会参加 ○関東学生夏期公認記録会参加
水泳部（競泳）	32名	○関東学生水球リーグ戦2部　第7位
ハンドボール部	38名	○関東学生ハンドボール春季リーグ男子5部　第4位 ○横須賀市ハンドボール春季リーグ ・1部第4位：防大Aチーム　2部第2位：防大Bチーム
アメリカンフットボール部	78名	○東京大学定期戦 ○西南學院大学遠征 ○オシナボウル参加
ソフトテニス部	34名	○神奈川県ソフトテニス春季学生リーグ戦1部　第3位 ○関東学生ソフトテニス春季リーグ戦5部　第4位 ○神奈川県学生トーナメント大会　ベスト16 ○全日本選手権大会神奈川県予選全日本大会進出 ：232(4)佐藤
ボクシング部	65名	○関東大学ボクシングリーグ戦3部　第5位
レスリング部	30名	○東日本学生レスリングリーグ戦 ・2部優勝(最優秀選手賞：241(4)下渡) ○春季大田区レスリング大会 ・優勝：141(2)阿部　準優勝：412(3)牧野 ○東日本学生レスリング春季新人戦 ・2部リーグ優勝：342(2)岡本　準優勝：211(2)岡崎
フィールドホッケー部（男子）	46名	○関東学生ホッケー春季リーグ戦2部　第3位
フィールドホッケー部（女子）	15名	○関東学生ホッケー春季リーグ戦2部　準優勝 ○関東学生ホッケーリーグ入れ替え戦　敗北(2部残留)
準硬式野球部	43名	○神奈川大学準硬式野球春季リーグ戦　10戦3勝7敗
体操部	33名	○東日本学生体操競技グループ選手権大会男子団体 第8位 ○東日本理工科系大学体操競技選手権大会男子団体 準優勝

校友会名	部員数	活動状況
フェンシング部	26名	○関東学生フェンシングリーグ戦(フルーレ)団体3部　第4位 ○関東学生フェンシングリーグ戦(エペ)団体3部　優勝 ○関東学生フェンシングリーグ入れ替え戦団体3部　敗退 ○春季関東国公立フェンシング大会 ・個人(エペ)優勝：122(3)島田　第4位：341(3)植村 ・団体(フルーレ)第3位 ○全国国公立フェンシング大会 ・団体(エペ)準優勝 ・男子団体(フルーレ)第5位 ・女子団体(フルーレ(他大学合同))優勝
ウェイトリフティング部	19名	○第51回ウェイトリフティング新人大会 ・個人第2位：112(2)中津
バドミントン部	51名	○関東学生バドミントン春季リーグ戦4部Aブロック：第4位 ○神奈川学生バドミントンダブルス戦 ・2部第3位：131(4)優阪谷・441(4)伊藤ペア ・3部準優勝：122(4)宮田・241(4)佐藤ペア ○神奈川学生バドミントンシングルス戦 ・1部準優勝：332(3)髙島 ・2部優勝：241(2)前田　準優勝：131(4)阪谷 ・3部優勝：312(2)後藤　準優勝：332(4)長沼 第3位：432(3)信貴　412(3)安井 ○関東学生バドミントン秋季リーグ戦5部Cブロック　第1位
短艇委員会	50名	○第57回全日本カッター競技会優勝 ○第57回全日本カッター競技会新人戦優勝
ボート部	34名	○5大学レガッタエイト第2位　フォア第4位 ○全日本ボート軽量級選手権大会エイト第5位(予選第2位) ○全日本大学選手権大会フォア第2位(予選第4位) エイト第2位(予選第4位)
ヨット部(小型)	21名	○関東学生ヨット春季選手権大会 ・スナイプ級予選第9位　470級予選12位 ○関東470級フリート ・470級団体優勝 ・個人優勝：212(4)武曽　222(2)三澤 第3位：242(4)秋元　121(2)葛城
ヨット部(クルーザー)	14名	○関東フリートスプリングレガッタ第15位
山岳部	11名	○五龍岳GW合宿、鷹取山合宿、広沢寺合宿、八ヶ岳合宿
ワンダーフォーゲル部	19名	○旧人合宿、新歓合宿
グライダー部	26名	○木更津駐屯地・妻沼滑空場・長野滑空場における飛行訓練
パラシュート部	12名	○全日本選手権アキュラシー大会団体戦　第3位 ○開校記念祭展示降下
自転車競技部	18名	○春のひたちなかエンデューロ参加 ○全日本RCS第2戦参加 ○新島トライアスロン参加 ○JCRCシリーズ第5戦in日本CSC　Eクラス　第6位 ○NISSAN CUP 神奈川トライアスロン大会参加
吹奏楽部	39名	○音楽隊としての活動(開校記念祭、月例観閲式等) ○文化部合同発表会及び開校記念祭における演奏 ○電力中央研究所におけるパレード支援 ○定期演奏会

平成25年度前期校友会活動主要成果及び部員状況

校友会名	部員数	活動状況
新聞委員会	0名	○活動なし
雑誌委員会	3名	○雑誌小原台94号作成に関する企画
放送委員会	16名	○各種学校行事放送支援(入校式を含めた各種行事)
アカシア会	14名	○文化部合同発表会における発表
模型制作同好会	9名	○文化部合同発表会における作品展示
写真映画研究部	13名	○入校式、春季競技会、月例観閲式、文化部合同発表会 夏季競技会、開校記念祭等における広報(写真)活動
コンピュータ研究同好会	19名	○春季情報処理技術者試験受験 ○夏季部内発表会 ○文化部合同発表会 ○夏季講習会
防衛学研究同好会	17名	○八王子セミナー
茶道部	23名	○文化部合同発表会茶会供 ○開校記念祭における来校者へのお茶の提供 ○靖国茶会
棋道部	12名	○春季関東学生囲碁団体戦　第5位 ○宝酒造杯　クラス別チャンピオン戦東京大会 ・二段戦優勝：341(4)大友 ・初段戦準優勝：111(4)猪八重 ○宝酒造杯　クラス別チャンピオン戦東京大会第2戦 ・女子個人準優勝：412(3)持丸 ○秋季関東学生囲碁団体戦 ・5部リーグ第3位
音楽部	36名	○文化部合同発表会、開校記念祭での合唱
軽音楽部	13名	○文化部合同発表会、開校記念祭でのバンド演奏

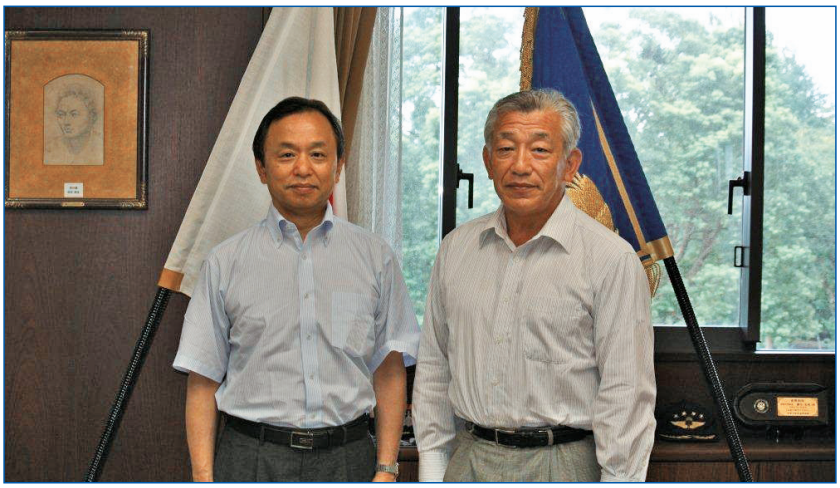
校友会名	部員数	活動状況
古典ギター部	13名	○文化部合同発表会、開校記念祭での楽曲発表
文芸同好会	4名	○文化部合同発表会、開校記念祭での詩集配布
詩吟同好会	2名	○第33回詩吟温習会 ○第28回年齢別吟詠コンクール大会 ○横須賀市民芸能祭及び詩吟連盟コンクール大会 ○文化部合同発表会、開校記念祭での詩吟発表
書道同好会	4名	○文化部合同発表会、開校記念祭での発表
生花同好会	0名	○活動なし
心理研究同好会	5名	○文化部合同発表会での発表
紅太鼓同好会	11名	○文化部合同発表会、開校記念祭での楽曲演奏
ダーツ同好会	10名	○文化部合同発表会での発表
タイ文化研究同好会	18名	○文化部合同発表会での発表、開校記念祭でのタイ文化展示及び模擬店出店
韓国文化研究同好会	13名	○文化部合同発表会での発表、開校記念祭での韓国文化展示及び模擬店出店
インドネシア文化研究同好会	8名	○文化部合同発表会での発表、開校記念祭でのインドネシア文化展示及び模擬店出店
ベトナム文化研究同好会	29名	○文化部合同発表会での発表、開校記念祭でのベトナム文化展示及び模擬店出店
モンゴル文化研究同好会	11名	○文化部合同発表会での発表、開校記念祭でのモンゴル文化展示及び模擬店出店
カンボジア文化研究同好会	9名	○文化部合同発表会、開校記念祭でのカンボジア文化展示
東ティモール文化研究同好会	8名	○文化部合同発表会、開校記念祭での東ティモール文化展示

会長対談集

永岩会長の防衛大学校訪問

平成25年8月20日（火）、小原台は夏休暇中で学生の姿は校友会夏合宿以外まばらな炎天下の静けさにある中、防衛大学校同窓会の永岩俊道会長が國分良成学校長及び幹事の田邉揮司良陸将を訪問表敬し、対談を実施した。特に、「教育方針」「教育の現状と今後の改革の方向性」「日本に関わる安全保障環境」「同窓会に対する要望事項」をテーマとした対談を事前にお願いしていたが、お二人ともに建学の精神に思いを馳せつつ,熱く防大教育の現状と将来について語られた。

「さらなる高みを求めて」國分良成学校長との対談



～防衛大学校における教育とは～

＜会長＞

部隊視察をされて防大出身の幹部をご覧になられてどの様に感じられましたか。その印象とともに、防大教育についてのお考えをお聞かせください。

＜学校長＞

部隊で多数の部下を指揮し、国民の目に見えない状況においても黙々とひたむきに頑張っている姿に感動を覚えました。学校長として意を強くした次第です。

＜会長＞

防大卒業生は、部隊の各レベルにおいて必ずそのリーダーシップが問われます。その礎を築くべき防大のリーダーシップ教育の在り方についてどのようにお考えですか。

＜学校長＞

教育、特に防大の教育は速効的なものではなく、20年から30年先を見通したものでなければなりません。時代に流されず建学の精神に戻り、60年に及ぶ防大教育の試行錯誤の過程を整理することが大切です。

「リーダーシップ」でまず大事なことは、優れた人間性でしょう。将来の任務に必要な幅と奥行きのある人間性とは何かを見つめる必要があります。論理的な思考力と併せ、日本文化や世界に関する教養は、人間性育成の基盤となります。昨年、近藤誠一文化庁長官（現在は退官）をお招きし、国防と文化の関係についてお話しをいただきました。その一つの論点は「日本を守るというときの日本とは？」この問いには、日本文化に対する真剣な考察によって身につけた教養が不可欠です。部下から見て魅力溢れるリーダーは、この様な教養に裏打ちされた人間性を有していると思います。

そのために読書の習慣は大切です。学生舎を回ってみると、やや読書量が足りない印象を覚えます。各学生が真摯に学生の本分を尽くし頑張っていることを承知しているがゆえに、やや残念な感じがいたします。

＜会長＞

私の経験からみて、防大の学生時代はとにかく忙しかった記憶があります。現在の学生はカリキュラムも更に大幅に増え、読書の時間をつくるのも大変なことでしょう。

＜学校長＞

学校の職員は、皆それぞれの立場で学生のことを考えているのです。そのため、一般学科の教官、防衛学の教官、訓練担当の教官、学生舎の指導官、校友会等、それぞれの立場で、学生の時間を多く確保したいのです。

現在、学校長から各職員への要望として、異なる担当

の職員間で交流を行っています。時には別の視点で学生の姿を見つめ、トータルの学生生活を把握してほしい。すべては、「学生を主体に考える」ところから始まります。

～統合運用の時代における防大教育～

＜会長＞

統合運用の時代となり、陸海空を合わせた世界の士官学校においてもユニークな防大教育が、まさに真価を問われる現在において、学校長のお考えは如何ですか。実際のところ、未だ、統合作戦・運用に係る課題多々の状況ですが。

＜学校長＞

60年前の建学時に、将来の陸海空自の幹部を共に育成するとした思想はまさに卓見です。卒業後、10年20年は各自衛隊における活動が主体でしょうが、その先の部隊を束ねる立場に立った時、防大時代の絆は貴重な財産となることでしょう。何か事が起こって、統合運用される時は言うまでもありません。3自衛隊が有効に機能し得るか否かの要素の一つに、防大時代の絆は確実に入ると思います。

また、防大出身の幹部は、接してみて極めてオープンな印象を受けます。一般大学出身の幹部に対しても、シビルの教官に対しても垣根がなく、胸襟が開かれています。開かれた防大教育の証しと言えましょう。

～日本及び自衛隊を取り巻く情勢認識～

＜会長＞

「今、そこにある危機」防大の卒業式において、安倍総理の述べられた言葉です。自衛隊の役割が大きくなる予感の中で、防大生自身が時代のプレッシャーを感じていることと思います。ご専門の観点から日本そして自衛隊を取り巻く各種環境への御認識は如何なものでしょうか。

＜学校長＞

自衛隊の重要な役割は大きく3項目あると認識しています。第1の項目は、日本を取り巻く安全保障環境を安定させて保つ最終的な担保としての役割です。近年、活性化しつつある周辺国の状況も踏まえ、適切に機能を発揮していかねばなりません。第2の項目は、PKO等の活動による国際貢献ですが、これまでの地道な努力の積み重ねによる多くの実績は大きく評価されるべき内容を有しています。第3の項目は、先の大震災対処における自衛隊の活躍に見られるごとく、各種災害の多発する我が国の対処活動の大きな柱としての役割です。

これらの役割を適切かつ有効に果たしていく上で、考慮すべき問題点は二つあります。第1が日本経済のゆくえです。財政問題と防衛力整備は密接に関連していることはご承知の通りです。日本の国際的存在感を高めるためにも、経済力の回復が不可欠です。第2は同盟国である米国のアジアにおける存在、動向の行方です。米国もアジア重視とはいえ、日本と同様、財政問題をはじめ多くの国内事情を抱えています。これまでの様に、米国のアジアにおけるプレゼンスに全面的に期待し得るか予断を許しません。

～変化する時代と、さらなる高み～

＜会長＞

作戦環境が拡大する中で、自衛隊も新たな機能・能力を確保していく必要があると考えます。例えば、サイバー及び宇宙空間に対する対応力の拡充など各国ともに鋭意推進中です。私は米国空軍士官学校からの留学生のホストファミリーになったことがありますが、その留学生は「宇宙工学」専攻でした。また、米国の軍学校では、「国家レベルの将来予測される危機に対するシミュレーション（クライシス・シミュレーション）」が行われていると聞きました。変化する時代にあって、その変化に対応し得る資質の育成は極めて重要と思いますが、防大教育においては、どの様にお考えでしょうか。

＜学校長＞

防大教育においても、時代の変化への対応は極めて重要なテーマです。現在、学校長の私が学内に呼びかけて、あらゆる機会をとらえて、さらなる高みを目指して議論中です。1学年480人体制の評価及び検討、時代の変化

に対応した新しい学問領域の検討等、考えるべきことは山積していますが、まずは足元を見つめ、出来るところから着実に実施して行きたいと考えています。

現状に甘んじることなく、さらなる高みを目指した努力が大切なことだと認識しております。

～「足跡の記憶」防大同窓会への要望～

＜会長＞

防大同窓会は現役1万人を含め2万4千名が在籍し、現役を終えても、防大に対する熱い想いを抱き「防大の発展」「社会貢献」等に尽力したいとする同窓生も大勢おります。何か同窓会にご要望はありますか。

＜学校長＞

現在、学内においても鋭意考えているのは「防大の歴史そのものをきちんと残す」という事柄です。その時代、時代に足跡を残してきた先輩達の姿を歴史に留める活動は、防大の伝統及び新たな将来に向けての前進に大きな力を与えてくれます。この歴史に防大及び防大卒業生の名を留める活動に、同窓会も御尽力いただければ幸いです。

＜会長＞

同窓生の中には、職に殉じた方も多く、また有形無形の足跡は数多く存在します。この卒業生達の姿を目で見える形で在校する学生に提示出来れば、とても有意義な事だと思います。

また、安全保障関連の各種ポテンシャルを有した卒業生も大勢おりますが、現状では、その全体像が確実に把握されていないのが実態です。同窓生の有する各種の知見、経験をデータベース化して、検索する態勢を整える。同窓会ホームページにおいて、現在、検討中です。

～防大と同窓生を結ぶ絆～

＜学校長＞

データベースのお話は素晴らしいことです。卒業生の方々が有するポテンシャルを学生達が知ることにより、将来に向けて大きな動機付けになります。

また、同窓の卒業生の方々には、是非、防大に来ていただき在校生達と交流を持って頂きたい。今年の開校祭には3代にわたる統合幕僚長においでいただき、私の司会でパネルディスカッションを開催する予定です。学生達も楽しみにしています。

更に、卒業した留学生の存在も大変大きなものです。まさに、貴重な財産と言えるでしょう。これから東南アジアの国々を数多く訪問し、各国の同窓生と防衛交流の拡大を含めて語り合うつもりです。

＜会長＞

私も航空支援集団司令官としてタイのウタパオ海軍基地に立ち寄った際、タイの防大同窓生20数人が歓迎会を催してくれ、大変感激いたしました。

また、今年度は私達15期生がホームカミングデーにより来校させていただく予定です。昨年の14期ホームカミングのお話を学校長が各所でしてくださり、14期生がとても感謝しておりました。本年もよろしくお願いいたします。

＜学校長＞

ホームカミングデーのイベントは学校長の私にとりましても、同窓会との交流行事として大切にすべきものです。今後とも、同窓会との緊密な連携を保ちつつ、防大における教育をさらなる高みに向けて推し進めていく所存です。

ご支援ご協力の程、よろしくお願いいたします。

「防大教育への想い」幹事　田邉揮司良　陸将との対談

学校長との対談に先立ち、会長と幹事の対談が行われたが、合気道部の先輩・後輩にあたる関係から、なごやか雰囲気の中で、合気道開祖の地である和歌山及び伊勢神宮に関わる懇談から開始された。気心の知れた関係であり、また、限られた時間でもあったため、幹事が胸に暖めた思いを一気に語り、密度の高い時間が瞬時に経過した感じのする対談であった。

～防大教育におけるリーダーシップ～

＜会長＞

北の守りにあと数日で赴かれる多忙な時期にうかがい恐縮です。是非とも防大幹事として、教育にかけた思いを伺いたくて対談させていただくこととしました。（8月27日付、北部方面総監）

＜幹事＞

部隊勤務において以前から中隊長以下の防大出身幹部がリーダーシップを発揮しきれていないと感じていました。仕事を抱え過ぎている事も要因ですが、防大に戻り、幹事としての目で見てみますと、彼ら初級～中級幹部は防大の学生時代に「学生が学生を教育する」体験を有しておらず、勤務学生はそれなりの行動を取りますが、室長が室員を指導する状況には無かった事が確認出来ました。

学生舎においては「指導官が学生を教育指導する」から「学生が学生を教育指導する」に意識を改革することが必要だと感じた次第です。年2回、学校職員の学生舎泊まり込み生活体験が行われ私も参加しましたが、このような時は、学生達も構えない自然な姿で幹事の私とも接してくれ、学生舎の実態をよく把握できました。

リーダーシップとフォロアーシップは不離一体のもので、フォロアーシップを知らなければリーダーシップは発揮出来ません。このあたりの教育が学生舎等の生活の場で、組織的に行われていなかったと感じたのです。

幹事の私としては、指導官を介しながら指導することに留意しました。学校長の学生に対する接し方は極めて温かく感服し、種々学ばせていただきました。その中でも「防衛大学校は何のためにあるのか。どの様な学生を育てるためにあるのか。」を常に考えておられ、「学生が間違った事をやってしまっても、どう是正するかについて、指導官等が直ぐ介在するのではなく、まず学生自身に考えさせましょう」ということにご理解を得ています。その思いを幹事として各指導官に月に1回直接伝えて来ました。若い指導官はまさに「指導官が学生を教育指導する」学生舎生活をしてきた世代ですが、思いを共有してよく努力してくれました。

～防大教育における「学生の意識」の重要性～

＜幹事＞

本科学生の入試制度は「推薦、総合選抜、一般（前期日程、後期日程）」となりました。新たに設けられた総合選抜は、クラブ活動等で顕著な成績をおさめ、かつ相応の学力を有する事が求められますが、特筆すべきは、その意識レベルの高さだと思います。合格した者は100%全員が着校しました。

一般採用試験における後期日程の意味合いにも関連しますが、学生が自衛隊幹部となろうとする意識の度合いは、今後、十分に現状を評価しつつ対処すべき課題だと

感じています。本来の建学の精神に合致した「学生の意識（幹部自衛官を目指す強い想い）」という視点が防大の教育においてますます重要な時代だと思います。

～防大卒業生の足跡と記憶の共有～

＜幹事＞

防大も開校60周年となり、資料館の充実も進み、槇初代校長の肖像画も同窓会の御尽力もいただきつつ、館内のエントランスに見やすく設置出来ました。

しかし、かつてウエストポイントやアナポリスを訪問した時と比べ、卒業生の歴史、足跡が見えて来ないのです。確かに、戦後の自衛隊においては戦陣における武勲はありませんが、多くの殉職された卒業生がおられ、各種の輝かしい足跡もあると思います。例えば、冷戦構造の中における諸活動等々、その業績、足跡をしっかり防大の歴史、記憶に残さなければなりません。ニューヨークの9.11メモリアルホールには、記憶端末による検索システムがあり、関係した人達の生き様が共有できる仕組みになっています。

防大卒業生の足跡を共有する仕組み作りは、同窓会にも御支援いただき、今後、進めなければならない大切な事柄だと認識しています。

防衛学教育学群長　武藤茂樹空将補との懇談

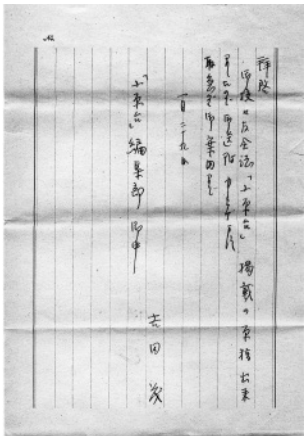
多忙な転属前の状況において防衛学教育学群長　武藤茂樹空将補との懇談ももたれた。（8月22日付、航空幕僚監部人事教育部長）

短時間ではあったが、思い出のポンドで8月の光る海とダビットを背景に旧交が叙せられた。会長、教育学群長は共に空自の戦闘機操縦者であり、かつて空幕等における上司、部下の関係でもあったが、小原台における話題は、防大教育、防衛学のあり方、当世の学生気質そして校友会活動（会長：合気道部、教育学群長：銃剣道部）等であり、揺籃の母校に相応しい懇談となった。

吉田茂元総理の「小原台」草稿

阿萬　功（2期・陸上）

探しあぐねていた吉田書簡がひょっこり出てきた。吉田元総理から、昭和32年（1957）の防衛大学校第一期生卒業に際し、校友会誌「小原台」（第七号）に寄稿頂いた原稿である。この機に、その［吉田稿］にかかわることを書き記しておきたいと思う。



吉田さんに叱られた

一期生卒業当時、「小原台」編集を担当した私には強烈な思い出がある。

保安大学校を創設し、一期二期入校時の総理であった吉田さんに寄稿をお願いし、自筆の原稿を頂いた。その「寄稿文（訓示）」で記念号の誌面を飾り満足したのだが……。

「小原台」誌の納品が遅かったため、卒業式当日に、部員（文芸部、校友会誌「小原台」編集部）を動員して式典会場傍で販売した。

その卒業式典の壇上で、吉田さんは開口一番……。

「請われて《小原台》に書いた。その内容をこれから話したい。その《小原台》をまだ貰ってないが、廊下では販売していたようだ。まず寄稿者に贈るのが礼儀である。」と。

驚いたのなんの。式のあと、校長秘書室に駆けつけ、秘書官指宿1尉に［卒業記念号］を届け、吉田さんへのとりなしを頼み、脱兎のごとく退散。

忘れられない失敗だが、槇校長や井畔教授や竹下幹事にこの件で叱られた記憶はない。若造の不始末を温かく見逃して下さったのか……。

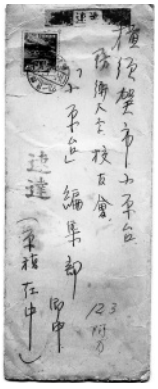
寄稿文と卒業式訓示

「小原台」への寄稿文と、卒業式での訓示とが混同されているようなので、整理しておきたい。

「小原台」への寄稿・吉田書簡（原稿）は、昭和32年1月30日午前大磯局に速達にて投函し、同日午後久里浜局が受けていることが消印でわかる。封筒と原稿等の内容は写真でご覧頂くとして、これが「小原台」第七号掲載の原文である。

この内容をもって吉田さんの卒業式訓示として紹介されることがあるが、そうではない。式典では掲載文を基に訓示されたのである。式典時の録音や書き起こしがどうなっているのかは寡聞にして知らないが、「小原台」掲載文は3月26日の卒業式訓示そのものではない。

私自身は式典訓示の内容に記憶がない。ただ、歴史的な防大一期生の卒業式で「元総理の吉田さんに叱られた」という印象だけが強く残っている。



「現代的仮名遣い」とタイトルなど

「吉田稿」について、編集者の責任・義務として触れておきたい。

手書き（ペン）の原稿はすべて完全な「現代仮名遣い」なのである。あの吉田さんが「歴史的仮名遣い」に全くこだわっていなかったことに驚く。

「現代仮名遣い」そのものは［昭和21年内閣告示第33号「現代かなづかい」］でスタートしているので、自らそれに従っていたということになる。

ところが「小原台」掲載文のタイトル「防大生に與ふ」

は「歴史的仮名遣い」であり、しかもこのタイトルは原文（原稿）にはない。私が勝手につけたのか、誰かからの指示があったのか、今はもう記憶にない。

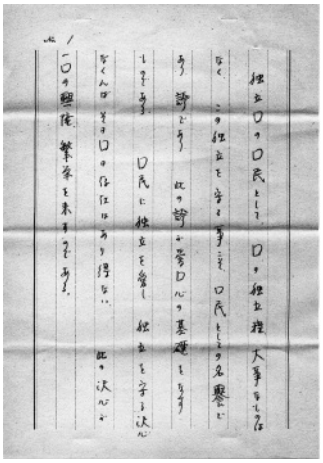
更に「小原台」の「吉田訓示」についての「勇み足編輯校正」を告白しておきたい。

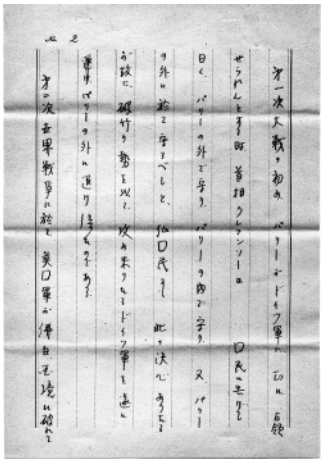
原文の「現代仮名遣い」をすべて「歴史的仮名遣い」に改めている。天下の吉田総理の稿を、青二才が勝手に編輯校正したのだから忸怩たる思いがあるが、今振り返って誠に申し訳なく思う。

原文の「委棄」を「遺棄」としたり、その他句読点や勝手な読み変え・訂正などをしているようである。

「現代仮名遣い」に徹底していた吉田さんに対し非礼であったばかりではなく、史実を曲げてしまったことに罪悪感を抱いてしまう。

そのような観点からも［吉田稿］の発見は重要な意味が感じられ、公開する責任を感じた所以でもある。





常用漢字と［吉田］

更に［吉田］の漢字についても記しておきたい。

吉田さんの署名は、封書・拝啓文・原稿のすべてが「吉田」となっている。

「吉」は常用漢字として統一されているが、かつては「土」か「士」に「口」という2字が使われていた。

そして吉田さんはご自分の姓が「土」＋「口」だと称されていたにもかかわらず、ある時期から常用漢字とされた「吉」と使用していたことになる。

公文書の吉田署名を調べ、時系列的に並べてみて、納得はできた。

次のようになる。（公文書の「吉田茂」署名による）

21年11月3日　「憲法の公布」では、旧字「土」

（21年11月16日　昭和21年内閣訓令第7号「常用漢字」）

22年5月6日　「第1回特別国会召集の詔書」では、新字「士」

「常用漢字」訓令の前後で、「吉田」の署名を書き分けているのだ。総理の立場として「当然」かも知れないが、姓に固執しなかったということだ。

「漢字」も「仮名遣い」も新しいルールに従う……という至極当然のことを、吉田さん自らが範を垂れていたという発見である。

（私事だが、私は学生時代「万」を用いたが、のちに「萬」に戻した。常用漢字より戸籍の文字に固執して、今に至っている。）

自筆ではない！？

当時からずっと「吉田さんの自筆」と信じていながら、文字の線が細いのが気になっていた。「吉田さんは太字の万年筆」というイメージが強かったから、吉田さんの自筆署名を探したが、筆字ばかりでペン字のものがない。

最近になって、「吉田書簡」を見た先輩から「自筆ではない可能性」について連絡があった。自筆でなければ誠に残念ではあるが、防大一期卒業にかかわる歴史的書簡であることは間違いない。

書簡には途中修文もあり、誰かが改めて清書した風にも見えないので「自筆」を信じていたのだが、誰の手になるものだろうか。

密かな妄想までしてみた。

「もしかして坂本喜代子さん（小りんさん）の手ではないか」

吉田さんが気兼ねなく口述筆記を頼める人……そんな思いつきで、小りんさんの文字探しをしてみたが、どこにもない。妄想は妄想か……。

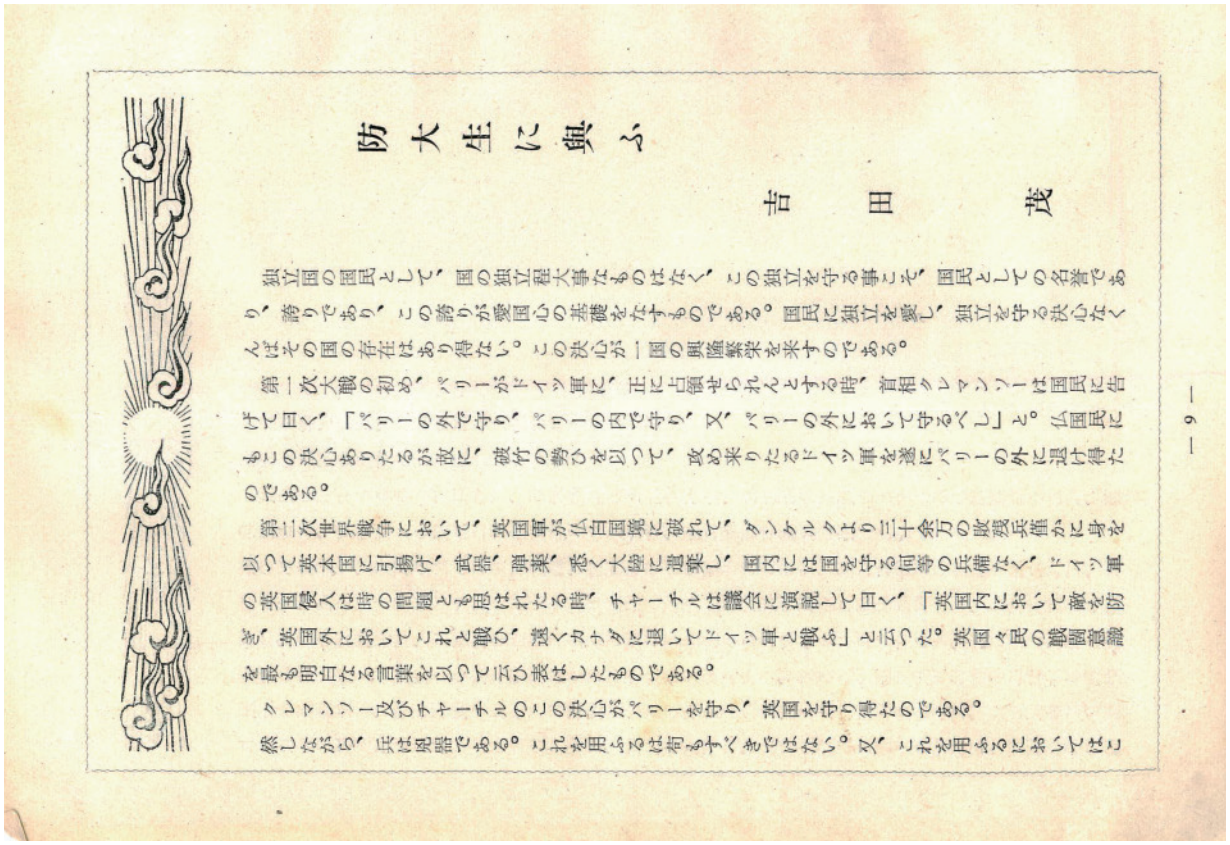
言い訳

以上、駄文を連ねたが、防衛大学草創期の史実として、少なくとも次の2点を書き遺しておきたい一念でその要約を綴ってみた。

(1) 原文は「現代仮名遣い」であること。

(2)「吉田」は［土］［口］で明記してあること。

非礼のこと、ご容赦頂きたい。



防大生に與ふ

吉田　茂

独立国の国民として、国の独立程大事なものはなく、この独立を守る事こそ、国民としての名誉であり、誇りであり、この誇りが愛国心の基礎をなすものである。国民に独立を愛し、独立を守る決心なくんばその国の存在はあり得ない。この決心が一国の興隆繁栄を来すのである。

第一次大戦の初め、パリーがドイツ軍に、正に占領せられんとする時、首相クレマンソーは国民に告げて曰く、「パリーの外で守り、パリーの内で守り、又パリーの外において守るべし」と。仏国民にもこの決心ありたるが故に、破竹の勢ひを以つて、攻め来りたるドイツ軍を遂にパリーの外に退け得たのである。

第二次世界戦争において、英国軍が仏白国境に破れて、ダンケルクより三十余万の敗残兵僅かに身を以つて英本国に引揚げ、武器、弾薬、悉く大陸に遺棄し、国内には国を守る何等の兵備なく、ドイツ軍の英国侵入は時の問題とも思はれたる時、チャーチルは議会に演説して曰く、「英国内において敵を防ぎ、英国外においてこれと戦ひ、遂にカナダに退いてドイツ軍と戦ふ」と云つた。英国々民の戦闘意識を最も明白なる言葉を以つて云ひ表はしたものである。

クレマンソー及びチャーチルのこの決心がパリーを守り、英国を守り得たのである。

然しながら、兵は兇器である。これを用ふるは苟もすべきではない。又これを用ふるにおいてはこれを止むる用意がなければならない。所謂、武なる文字は、戈を止むると書くのである。日露戦争の時児玉参謀総長は、奏天開戦を以つて日露戦争を終るべき時なり、と大本営に進言して、兵を収めて日露戦役の功を全うした。この遠謀深慮ありてこそ武将と云ふべく、然るに、第二次世界戦争におけるわが軍は、その勇戦善戦、日露戦争当時に比べて優るとも劣ることなかりしにも拘らず、進むをして退くを知らず、遠くブーゲンビル、ラバールまで進出して徒らに大兵を孤島に集中暴露して、日本本国との連絡の用意なく、米軍のために我が艦船、飛行機等の皆滅せらるるや、遂に本国との連絡を絶たれて、大兵空しく、南洋海上の孤島に置去りにされて全敗、遂に南方作戦は頓挫した。

歴史の示すところは、以つて、将来の戒めとなすべく、兵を用ひて兵をとどむるの用意なくんば、善謀善戦も何の益するところなし。

兵を学ぶ諸君、常に玆に心を致されんことを望む。

（元総理大臣、衆議院議員）

吉田茂元総理による小原台掲載記事

機械1班の宝 24冊余のエッセー集

小田原　昭（2期・陸上）

2期生　機械第1班、2年生になった時以来の仲間である。別の名を「三一会」と称す。

会員が自衛隊を卒業した平成4年、会長栗岡武郎氏の提案で「会誌」発行の運びとなった。

作成担当は、学生時代、文芸部に席を置き校友会誌「小原台」の編集に青春の全てを捧げた阿萬功氏。

平成5年に「絆」と命名されＡ－5版45頁、ささやかな創刊号が完成した。

以来、毎年発刊されるが、すぐに100頁となり、やがて200頁に迫る大エッセー集となった。

はじめは、色気のない文章だけの会誌であったが、やがて挿絵がつけられ読みやすく親しみやすくなる。さらに絵画・写真等が加わり会誌は次第に充実してきた。

同期の集まりでは、会員が「絆」の話題を「誇らしげ」に披露するようになった。

創刊から20年、「あっ」と言う間であった。平成24年、第20号をもって「絆」最終号とした。喜寿を迎え作成限界が近づいていた。

最終号、卒業50周年記念号（共に2分冊）、それに追悼文集を加えると、これまで24冊を刊行。

最初は近況紹介が主体であったが、年を追うごとに経験談・見聞記・健康談義、論評・読後所感等々が加わり多彩な内容に発展して行った。

創刊号を見ると、投稿者の三分の一が天国に召されている。20年の歳月を感じる。

教務班編成以来の仲間であり、「絆」は何時、何処を開いても楽しいエッセー集である。時には著者の意外な側面を知る。健康面も参考になった。読書所感も利用させていただいた。

個人的には、「絆」の場を利用して来し方をまとめさせていただいた。

「絆」は会員全員（ご夫人を含みます）で作り上げた「三一会・機械1班の宝」である。

この20冊余が存在するためには、会誌作成の発案、作成する能力、寄稿する会員の協力、の三つが不可欠である。故栗岡大兄の提案に改めて感心し、20年にわたり原稿募集から編集・印刷・製本・発送を一人で担当された偉才の阿萬大兄に、素敵な挿絵を描いていただいた高岩大兄に会員一同から感謝の意を表したい。

なお、防衛大学校のご好意により、「絆」全冊を防大総合情報図書館で陳列していただけることとなりました。関係者の皆様に感謝の言葉もありません。ありがとうございました。

平成25年9月吉日
三一会を代表して
小田原　昭

復興に命をかける「村井嘉浩氏」宮城県知事選で3選

防衛大学校同窓会
元東北地域支部長
袖井　　孝（9期・陸上）

村井嘉浩氏（53）（防大28期・陸）は、今回の知事選で対立候補を大差で破り、見事3選を果たした。

宮城県知事 村井嘉浩氏

1　初当選及び2期

1期目は、2005（平成17）年10月の知事選で当選。「富県宮城」を掲げ、宮城県のトップセールスマンとして、県民の先頭に立ち、トヨタ自動車系列工場やパナソニック等の企業誘致を行い、多くの実績をあげてきた。

2期目も、2009（平成21）年10月、対立候補に大差をつけて当選すると、更なる宮城県の発展のために、引き続き、「富県宮城」を目ざし、企業誘致による1万人以上の雇用の創出、子育て支援と待機児童ゼロの実現、農業・水産業の加速と食糧自給率の向上を目ざして動き出し、多くの企業との立地協定の締結等に成果をあげていた。

2　震災復興へ

しかしながら、2011（平成23）年3月11日宮城県沖を震源とするマグニチュード9（阪神大震災の140倍のエネルギー規模）最大深度7の東日本大震災が発生、津波も東北の岩手・宮城・福島の三県に押し寄せ（宮城沿岸地域327平方キロ）、東北三県の県土は、未曾有の壊滅的な被害を受けた。

この大災害の事態に際し、村井知事は、陣頭指揮をとり、自衛隊への災害派遣要請をはじめ、関係諸機関等との連携を極めて迅速かつ、的確に行い、不眠不休で各種震災被害の早期復旧、復興に全力投入した。

また、長期的には、県の震災復興会議を早期に立ち上げ、同年10月には、今後10年間に亘る宮城県震災復興計画を正式に発足させるとともに、国の復興構想会議メンバーとして、復興財源の確保や高台移転、水産業特区等の提案を行った。

3　3期再選

震災後、2年半経過したが、被災地の復興は未だ達成されておらず、このような状況下において、被災地の宮城県を震災前以上の宮城県にしたい（創造的復興）ということを信念に、県民の期待と信頼を一身に受け立候補を決意し、2013（平成25）年10月、対立候補を大差で破り、見事3選果たした。

4　知事に期待

今後の村井知事としての課題は、

震災で被災し、仮設住宅で暮らす方々をいかに早く、安心して暮らせる住宅へ移転させるかであり、更には、選挙公約で掲げた各種課題への解決等、山積みしている。

知事は、県民の力を最大限に活用し、国、市町村、各種団体、そして、地域で暮らす県民の意見にも耳を傾け、県全体として大きなスクラムを組み諸施策を実行していきたいと所信を表明している。

防衛大学校出身の全国唯一の知事として、今後、歴史に残るご活躍を期待するのが、私たち同窓生の思いとして一致するところである。

バイク＆車で定年後も大いに楽しむ

森本　澄男（22期・陸上）

定年を迎えられた同窓生の皆様は、其々の人生観や趣味を持って多いに人生を楽しまれているものと推察しています。さて現役の時に本で読んだ話であるが、仕事一途の人が何の将来の準備もなく突然定年を迎えると、自分が何をしていいのか判らず、奥様の後を何時もぴったりくっつき「濡れ落葉：濡れている落葉がアスファルトに張付き、箒で掃いても掃いても剥がれない状態」に成り易いと言われている。この様にならないためには、現役の時から4種類の趣味を持つこと。それはインドアとアウトドアで、其々一人で遊ぶのと仲間で遊ぶ趣味の4種類であるとのことだった。勿論、描画のように一種でインドアとアウトドアの両方を兼ねるものもある。

私の周りの先輩方には、4種類は無いにしてもその技能が秀でており定年後の人生を謳歌している人は沢山いる。文化系では囲碁や将棋、書道や絵画、帆船や鉄道のジオラマ作製、盆栽、家庭菜園等はたまた芝居でプロになった方もいる。運動系では、剣道等の武道、ゴルフ、マラソン、登山、自転車、釣等等多岐に及ぶ。やはり、何かの趣味に適度に集中・没頭出来るということは人生に潤いをもたらしてくれるものと思う。（行き過ぎたギャンブルは除く）

私の場合を振り返ってみると、インドアは学生の頃のマージャン位で読書や模型製作、TVゲーム等幾つも試みるも長続きすることなく、今に至っても人に誇れるものは何もない。退職前の現役時代の単身生活（連続18年）では、雨が降って官舎から出られないのが最大の苦痛であり、この時は酒をちびちび飲みながら厚生課から無料で借りたDVDを見ることがインドアであった。これに比較しアウトドアは、単身生活でも心から楽しむことができた。まずは2年程度で頻繁に転勤するが、これは少し期間の長い旅行と捉えていたので、見知らぬ土地へ赴任するのが楽しみで仕方がなかった。その赴任した地域の風土、文化等を知るために目的や距離に応じて徒歩、自転車、バイク、車、公共交通機関でせっせと出掛けたものである。その他にも、登山、キャンプも単独或いは仲間と出掛けて楽しんだ。

本テーマは、アウトドアの趣味であるバイク・車がメインであるが、この趣味のジャンルは多彩であり複雑である。私なりにバイクの場合において、勝手に重複を厭わず分類してみると

①見　　栄：国内を移動するのに必要以上の機能を持った高級車・高額車を保有

②主　　張：爆音、異様に改造し、自分の存在が目立つ様に行動

③専　　一：他人にない自分だけのオリジナルに拘り、ひたすら車両を改造

④観　　賞：汚れているのが大嫌い、万全の整備、乗るよりは飾る方が好き

⑤鉄　　馬：乗馬や自転車の延長であり、風さえ感じれば良い

⑥威勢誇示：高級族であれ、暴走族であれ集団性を他人に威勢として誇示

⑦純　　好：価格の多寡に拘わらず、純粋にバイクを持ち乗ることのみが好き

⑧自己満足：自分の環境、所得等で一番良い物を入手したと満足

多分、まだ分類は有ると思われるがバイクが趣味と言っても複雑である。一般論で言えば、国内の移動は250ccあれば高速も乗れるし馬力も十分であるので、それを超える排気量のバイクの所有者は、自分を含め「見栄と自己満足」だと思っている。

私においても、バイク・車生活には歴史がある。しかし過去から現在に至るまで、決して裕福ではないので少ないお金でいかに楽しむかの歴史であり、高価な車両とは無縁で大衆車とか中古車を所有する楽しみでもあった。これら機械に接する原点は、田舎の兼業農家たる実家にあったと思う。保育所の頃には牛で農作業をしていたが、小学生の低学年の時に実家が2気筒ガソリンエンジンの耕運機を購入したので、機械としては初めてこれを運転させてもらった。小学生高学年になると、父親の通勤用のスーパーカブをバイクとして初めて運転させてもらった。初転倒もこの時に経験した。中学生になるとバイトで土方をしていたが、車として初めて中型のダンプトラックの運転を経験した。作業現場でダンプに自分で土を積み、運び、降ろすのである。高校生になると、大型バイクが欲しかったので、あちこちバイクを探しに回っていると、当時発売されたばかりで世界に衝撃を与えた量産初の4気筒ホンダCB750K0の半損事故車を見つけ、直ぐに鉄くずと同等の値段で買い取り、3年生までバイトでキャディーをしながら逐次整備し車検を通して乗っていた。しかし防大へ入校することが決まり、このバイクを持っていこうとしたら、地連から持込み禁止と言われて泣く泣くこのバイクを欲しいという後輩に譲って入校した。

防大卒業直後は経済的にバイクを買う余裕はなく、そのうち田舎に赴任することとなり車が必要となったので、

社会人となり初めて買った車は知り合いに安く譲ってもらった6年落ちのローレルSGLである。当時暴走族に大人気のSGXと同型の2ドアクーペであるが、持ち主の好意によりたったの5万円で取得した。傷だらけ、エアコン無しであったが逐次整備しながら、その後家庭を持つに至っても取得後5年間使用した。その後も10数年は家庭（経済性）重視でバイク無し、車は大衆車で推移しながらもバイク欲しさで悶々としていたが、遂に転機は来た。単身赴任の時であったが、長男が大学に入り当初原付を購入、次いで中型免許を取り250ccのバイクを買い、そして大型免許を取り750ccのバイクを買った。私は長男に頼まれて、それらのバイクを逐次下取りとして買ったのである。当初は原付、次いで250ccのバイクが手に入ったのである。嬉しくて仲間や単独でツーリングに行き2万km以上は乗ったと記憶している。この時、某所の駐屯地司令の職で40代後半であったが、参加したツーリング仲間の車種では、最下層の安価な部類であることに気が付いた。個人で出掛けた時も、すれ違う若いバイク乗りから「このオヤジ、その年齢でそんなバイクにしか乗れないのかよ」という目線を痛く感じるようになった。この感覚は不思議なもので、やはり車格により優越感、劣等感を感じるもののようで前述の高級志向も判るような気がした。

私は分類上「鉄馬」であり、風を楽しむタイプでバイクはなんでも良いと思っていたが、偶然懇意にしていた某輸入車ディーラーから「広告に出す前の良い中古が入荷したが、買いますか？」と連絡があった。この車種は現役の頃にカタログを取得して、このバイク欲しいなと眺めていたが、経済的事情・家庭事情があり購入を諦めていたバイクであった。ディーラーから連絡のあった頃は、子供達の就職等も決まり、経済的にも余裕ができそうなのと単身の気楽さから購入を決意し、遂に念願かない取得できた。ただこの車種は不人気で、早々と発売中止になったので殆ど市場に流通しておらず、今では幻の車種になりつつあり入手出来るとは思っていなかった。

購入後に運転環境が変わったのは、排気量が650ccあるので前の250ccと比較し、馬力等が向上したのに加え車重もあるので長距離走行でも余裕と安定があり疲れなくなった。そして以前は休憩場所において、バイクが沢山留めてある駐車場を避けて、目立たない遠く離れた所に置いてこそこそと用事を済ませていたが、今では堂々と沢山の2輪車の合間に置けるようになった。やっぱり年齢と経歴、役職や収入により見栄は必要不可欠なような気がする。

単身赴任中の車については、やはり生活重視で何にでも使える大衆的なワゴンを使った。最初の単身赴任の時は中古の元上級セダンを持って行ったが、自転車や家具類も何も積めないことが分かり、これでは単身生活に支障があると判断したためこの車を廃車した次は、大きな荷物を運べるし登山に行けば車内泊も可能なワゴンにした。このワゴンは、以降10年間活躍してくれた。

地方で定年になり自分の家に帰ると、妻用の車と機能がほぼ同じ車2台を保有することとなった。子供も独立して妻と二人だけの生活なので、自分専用のM社のロードスターのようにオープンカーが欲しいと考えたが、もう一つの趣味であるゴルフのバックが積めないらしいので諦めた。そこで買った車は、凄く良いとの評判もある一方、エコカーなのかスポーツカーなのか良くわからない中途半端であるとの批判もある車である。

この車はそこそこ燃費も良く、またいざという時に加速等スポーツ性もまあまあ十分である。峠道等ではゴーカートのように地面に吸いついたような走りも楽しめている。いずれにしろ他人の言動に影響されず、自分の信条に即して家族や他人にも迷惑をかけず、健康で楽しく定年後の人生を過ごせれば良いなと思っている。（小原台だより編集委員の特権として、一文書きました。）

今人生、男盛り

終わりなき「剣の道」を求めて

安部　壽和（19期・陸上）

今から5年前、自衛官現役最後の年の平成20年11月、56歳にして剣道最高段位の八段審査に合格しました。剣道を始めて丁度半世紀50年の節目に合格率1%（1,600名中16名合格）の実に厳しい中での合格は、私にとって人生最大と言っても過言でない喜びでした。剣道八段の合格者は警察官あるいは教員のいわゆる剣道職業人が8割から9割を占め、現役自衛官からの合格者は自衛隊創設以来私で3人目、今日まで4人と承知しております。普通であればここまでくれば念願成就で、あとはしばし休養、のんびり楽しもうということになるのでしょうが、剣道の修行においてはそれは許されないことでした。

八段を目指して稽古をしている時にある先生から「八段審査というのは守破離の守の完成度をみるのだよ」と、八段といえどもまだまだ修行の入口であるとの指導を受け、また、昭和の剣聖と称される持田盛二先生という方がおられますが、その先生は「剣道は技だけじゃない。結局は胆と胆、すなわち心と心の戦いです。最後は胆力の鍛錬になるのです。私の剣道は50を過ぎてから本当の修行に入りました。心で剣道をしようとしたからです」と述べておられます。八段の取得はいまだ「守」即ち剣道の技の基本をなんとか認めていただいたに過ぎず、そこからが終わりのない修行の始まりであるということを肝に銘じて日々稽古に臨んでいるところです。

現在、平日は週2回の市ヶ谷駐屯地での昼の稽古と、同じく週2回の三菱思斉館道場での夜の稽古を基本として、土曜日は月1回の官公庁剣道連盟と関東自衛隊剣道連盟の稽古会のほか、この稽古会のない土曜日は朝霞の体育学校で「振武会」という高段位を目指す自衛官の現役・OBが集う稽古会を開いております。さらに曜日は決まっていませんが、月1回行われる全日本剣道連盟が主催する日本武道館での合同稽古会と東京都剣道連盟が主催する東京武道館での合同稽古会に可能な限り参加しております。それぞれの稽古では八段は元立ちとなりますので、その稽古会によって多少の時間の長短はありますが、約1時間元に立ちっぱなしの稽古となります。冷房の効く道場であればともかく、猛暑の夏の体育館等ではさすがに身にこたえます。かといって周囲から常に注目される立場上無様な稽古をお見せするわけにはゆかず、そこは我慢のしどころといったところです。以上のとおり稽古の回数、稽古量は八段になる前よりもむしろ多くなったと実感しております。また、土・日・祝日は剣道の大会や講習会、各段位の審査会も頻繁に行われ、その審判あるいは講師、審査員として要請を受けることがしばしばで、年間約30回ほどになります。

最近は試合に出場する機会は極めて少なくなりましたが、昨年の9月、私にとってはおそらく最後の大舞台となったであろうと思いますが、東京都剣道連盟が主催する「寛仁親王杯剣道八段選抜大会」に3回目の出場を果たし、東京都及びその近隣県から選抜された60歳以下の八段32名中のベスト8に入ることができました。これは私の剣道人生の貴重な財産の一つになっております。

また毎年5月3・4・5日には京都において全日本剣道演武大会という剣道の祭典が開催されておりますが、これには八段取得以来家内も帯同し毎年参加しております。この大会は六段以上の剣道愛好家たちが全国から京都武徳殿に集い、六段から順次全日本剣道連盟会長はじめ剣道界の大御所や会場を埋め尽くす観客の前で、3分間足らずの立会ではありますが1年間の修行の成果を披露するというものです。3人の審判により一応は勝敗を下されますが、勝敗よりはむしろ打って反省打たれて反省、気勢が充実し剣の理合いに適った会心の打突ができたかどうか、八段にふさわしい立会であったかどうかが問われるところであり、なかなか納得するまでに至らず、新たな修行の道標を得て感謝の気持ちで会場を後にしている次第です。

終わりに剣道の修行は心の修行であると先にも書きましたが、剣道の教えの一つに「四戒」即ち「驚・懼・疑・惑」の4つの心の動きを厳に戒めるべきこととし、泰然自若・不動の心で相対すべきことを説いておりますが、人の道にも通ずるその境地に一歩でも近づけるよう終わりのない修行を今後も続けてゆきたいと思っております。

寛仁親王杯剣道八段選抜大会

全日本剣道演武大会（京都）

ドックマスターとして

島田　喜末（19期・海上）

現在、ジャパン マリンユナイテッド株式会社（JMU）横浜事業所鶴見工場でドッグマスター（船渠長）として新造船の操船等に多忙な日々を送っています。私がドッグマスターとなり得た国家資格であるところの大型船の「海技士（航海）」の免状を取得しようとしたきっかけは、今から20年前の平成5年、40歳時の最初の艦長の任が終えるときでした。在任中、数々の海の知識技能等を会得することができたことから、これを何かに生かせないものかと、当時の護衛隊司令であったT氏に相談したところ「海技士の国家試験を取得してみたらどうか？」との回答。いざ志を立て、国家試験受験を目指しその準備をしたものの、その後は陸上の幕僚勤務で、結局チャレンジできたのは42歳時の2隻目の艦長の時でした。修理時期を利用して、幹部候補生及び練習艦隊時に習った天測計算、運用、海事法規etcなどをひっくり返しての猛勉強。当時は「ドックマスター」のことは全く考えず、取りあえず「三級海技士（航海）」を取得することだけが目標でした。三級を取得し「目標達成！」と自画自賛していたら、「せっかくだから一番高いところの一級を目指してみたら。」との妻の一言に単純に（笑い）反応し、再度奮起し二級の段階を経てようやく一級海技士を取得することができました。各級では次に示す乗船履歴と講習課程終了が必要であり、一級海技士の免状取得まで、約8年間を要しました。

「海技士（航海）」は、各級ともに総トン数1600トン以上の沿海区域を航行区域とする船舶に次に示す年数の乗船履歴が必要である。

「海技士（航海）」は、各級ともに総トン数1600トン以上の沿海区域を航行区域とする船舶に次に示す年数の乗船履歴が必要である。

- **一級海技士の受験資格：二級海技士の資格を有し船長又は1等航海士として1年以上。**
- **二級　〃　：三級海技士の資格を有し船舶職員として1年以上。**
- **三級　〃　：船舶の運航の職務に従事して4年以上。**
- **口述試験：運輸局で面接による口述試験。**
- **講習課程：レーダー観測者、救命、消火、レーダーシミュレータ、航海英語の各講習課程を修了。**
- **身体検査：視力、正常な運動のチェック。**

口述試験は、試験会場及び試験日が運輸局から指定され半日間の面接となりますが、質問事項に即座に回答しなければならず、難問に大汗をかいたのを覚えています。

各講習課程は、数日から一週間を要するもので、業務に支障のないようにとしても、なかなか日程がかみ合わず、結局盆休み、年末年始休暇時を利用して受講した次第です。（他の船員たちは、会社がしっかりとした計画を立てて、長期にわたる講習を支障なく受講している姿に触れました。当時からあったかもしれませんが、現在は海上自衛隊第1術科学校で同様のアレンジをしているようです。）

海幕補任課の配慮があったのかどうかはわかりませんが、どうにか乗船履歴を満たすことができ、念願の「一級海技士」を取得できたのは、艦長4隻目の平成15年（50歳時）の時でした。

56歳の定年時、海幕援護業務課から予てから話しがあった「ユニバーサル造船」に就職し、鶴見事業所で「ドックマスター」として仕事に就きましたが、構内作業での操船技能養成は、原則採用後の「OJT」となります。教科書はなく、必要とされる養成期間中に操船技能を習得しなければなりません。おかげで、構内作業用及び海上運転用ノート各3冊ずつになりました。ドックマスターとして5年間従事し、その間、官民を含めた新造船の試運転船長は21回（別に一等航海士として15回）、出入港は260回、進水は13回、出入渠は157回となります。これは私一人での回数であり鶴見にはドックマスターが2名いますので、工場としてはその倍数の作業回数になります。今思えば、この間、実に慌しく過ぎた感があります。

遅ればせながら、「ドックマスターとは？」とのご質問があろうかとか思うので若干説明いたします。

ドックマスターとは、造船所に所属し、造船所の関連海面において造船所が扱う船舶等を操船する者（造船所の船長と言ったらよいだろうか）を言う。造船所は船を作るだけではなく定期点検又は修繕でも船が入ってくる。造船所構内で船を移動する場合、本船船長には構内の特殊事情がわからないため、造船所所属のドックマスターが代わって操船することになる。構内は私有地であるから、私有地で自動車を動かすのに運転免許証が要らないのと同じように、海技免状は要らないのであるが、操船を行った経験が必要となる。海技免除を持っていれば、なお良いことになる。そこで船長経験者等が必要になってくる。船はオーダーメードによって造船所で造られるが、注文者に引き渡す前には、性能の確認が必要になる。そのため構外（主に日本沿海）に出て試運転が必要になる。引き渡される前の船は造船所の持ち物であり、いまだ本船の乗組員というものがおらず、造船所所属の人間で動かすことになるが、その場合でも船舶職員法上の職員が必要になる。そのために海技免状所持者が必要になり、船長が要ることになる。その業務は①船舶の運航に関する業務（進水関係業務・海上運転業務・修繕船運航業務・船舶係留に関する業務）②船舶運航以外の業務③工場における職制管理の業務（海務関係、船渠関係の職制管理・船舶の係留保全管理・その他海技と異なる業務）と言うことになります。

（日本船渠長協会ホームページ抜粋）

造船所の採用条件は、船舶職員として業務従事経験があり、船舶職員法に規定される一級海技士（航海）免状を保有することとなっています。ドックマスターが主に行う業務は操船であり、さまざまな船型、船種の船舶に対応し、また離着岸操船、入出渠操船、海上運転操船などの多岐にわたります。

海上運転時は早朝に出港しますので、6時過ぎには乗船し海図、双眼鏡etcの準備など出港前準備を行い、離岸、タグでの曳き出しを実施します。風の塔の北側の東京湾北部海域又は浦賀水道を南下し相模湾や大島東方海域で試運転を行います。見張りはいることはいるのですが専門職ではないため、自分ひとりと思って操船しています。引き渡す前の船なので、その性能を確認するため、100%以上の出力を出した前後進の最大速力、最大舵角での回頭運動を実施し、その都度機器の調整等を行います。新造船なので機器の調整がうまく行かず部品を取り寄せ復旧に当たることしばしばです。夜間入港制限がない船は、夜間入港はほぼ常時で、21時過ぎに入港することもありました。各週数日間の運転が連続します。立直しての操船ですので、気力体力をかなり要します。視力は特に大事で、今は両眼とも1.2程ありますが、1.0以下となりまた夜間の光に幻惑されるようなってきたら、その時こそキッパリと身を引く時期と考えています。あと何年今の仕事を続けられるかは不明ですが、その時期がきたならば、一級海技士の免状を持った良き後輩に引き継ごうと思っています。

構内作業時は本船及びタグの配置図、タグの入れ替えなどの流れに沿った要領図を作成し関係部署に配布し周知徹底を図るようにしています。特に出入渠時は狭いドックでの出し入れで風の影響をかなり受けますので、当日の風向風速にはかなり神経を使い、また順調に行かない場合の腹案を持って出入渠作業に臨みます。チームとして作業に当たり、チームとして作業を完遂しなければならず、ひとつの手順の間違いが大きな事故につながる恐れがあるので、季節や気温風速等を考慮し現場の人達の動きを勘案し「安全確実」なる作業の完遂に努めています。安全と危険は表裏一体といいますが、「目先が利いて几帳面、これぞ船乗り」また「計画は繊細に、実行は大胆に」と言うものの、何においても作業の「安全第一」こそがモットーです。

最後に感謝したいことがありますので一言。

壁にぶち当たった時、理由も聞かず即座に集ってくれた同期のＹ・Ｋ・Ｓさんに感謝。やはり同じ釜の飯を食った仲です。即学生時代の心境に戻り和み、悩みは吹っ切れました。

今まで安全に試運転及び構内作業行ってくれたメンバーに感謝。

これからも安全に作業できるようにと願い、そうできる皆に感謝。

42歳の時、さりげなく背中を押してくれた妻に感謝。

本年（平成25年）1月にユニバーサル造船株式会社とアイ・エイチ・アイ マリンユナイテッド株式会社（IHIMU）が統合しジャパン マリンユナイテッド株式会社（JMU）横浜事業所（磯子工場・鶴見工場）になり磯子工場及び鶴見工場双方の試運転・構内作業に従事するようになりました。それぞれの工場のやり方が違うところがありますので、作業手順をしっかりとして「安全第一」に、を心掛けていきます。

◎後輩の皆様で、自衛艦の検査修理などで鶴見工場、又は磯子工場に来られた折には、一声かけてください。こういう「今人生男盛り」の人間がいますので！

◎「小原台」

私にとって今まで生きてきた、これからも生きていく上での原点であり魂のふるさとです。そして強い絆の仲間ができたところです。

独立系FPとして皆様のライフプラン創りをお手伝い

辻　章嗣(19期・航空)

今、私は、ファイナンシャル・プランナー（FP）として独立系のFP会社である「株式会社FPプラザ・あい21」（本社：茨城県龍ケ崎市）の東京事務所（東京都中央区銀座）の所長として勤務しています。今日は、折角の機会ですので、私が、FPと言う資格に興味を持った経緯と、この仕事を人生最後の仕事に選んだ理由についてお話ししたいと思います。

1　FP資格との出会い

私が、FPと言う資格の存在を知ったのは、自衛隊を退職する10年前に参加した「能力開発集合訓練」における部外講師の一言でした。その講師は、「自衛隊退職後の再就職のために、何か資格を取りなさい。例えばFPと言う資格がありますよ。」と紹介され、「FPと言う資格は将来必ず伸びると思う。」とも言われました。当時、FPと言う資格を知る人は殆んどいませんでしたが、私は、何故かこの資格に縁を感じて直ぐに通信教育を申し込み半年後の1997年にはFPの入門資格であるAFP資格を取得しました。

私は、この資格に巡り合うまでは、戦闘機パイロットとして「飛ぶこと命」の人生を送って参りましたので、お金の事は妻に全て任せ自分は職務に専念してきました。しかし、丁度、この資格を取った時期は、戦闘飛行隊の飛行隊長を下番していたところで、ある程度その道を極めた感じがしていました。そのような時に、FP資格取得のために、税制や年金制度、保険の仕組、金融商品や不動産に関する知識を学ぶことは新鮮な気持ちでした。そして、ライフプランのテクニックを身に付けると、早速、自分自身のライフプランを創ってみました。その結果、生命保険で契約すべき必要額を計算し、合理的な保障額に改めることによって、浮いた保険料を住宅ローンの繰り上げ返済に充当することができ、数百万円の経費を節約することに成功しました。

この実体験を通じて、私は、更にFP資格への興味が増し、上級資格に挑戦することにしました。その結果、3年後の2000年には、FPの上級国際資格であるCFP®の資格を取得し、更に3年後の2003年には、社会保険労務士の試験にも合格することができました。また、FP資格は、その後、国家資格として認められましたので、2003年には、国家資格の1級ファイナンシャル・プランニング技能士にも認定されました。この間、単に資格を取るための勉強だけでは不十分と考え、理工系出身の私がこの分野における知識を深めるため、資格取得の勉強と並行して放送大学にも入学しました。そして、卒業までに9年もかかりましたが2005年には、社会と経済専攻の学士として無事卒業することができました。

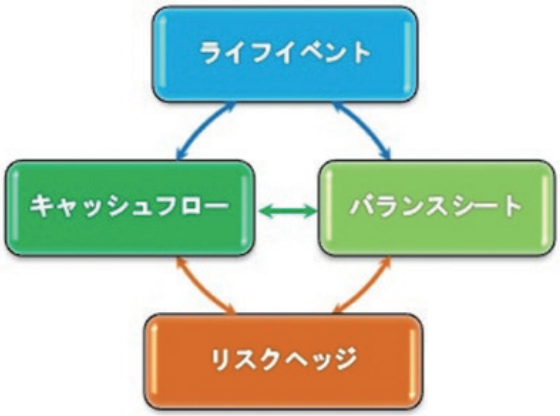
2　FPとしての歩み

私は、私の実体験と長年学んできたことから、ライフプランは、一人残らず皆様のお役に立つとの信念を持っています。したがいまして、現役時代から同僚や部下隊員から相談を受けた場合には、喜んでライフプランの分析を無料で提供することにより、退職後の生活設計等に役立てて頂いていました。

それが縁で、自衛隊を退職した後は、FP資格を生かすために生命保険会社に顧問として就職させて頂き、約5年間勤務しました。その保険会社では、防衛省が組織を挙げて取り組んでいるライフプラン・セミナーの責任者として、セミナー資料の作成や社員教育にあたりました。そして、自らも全国各地の駐屯地や基地においてセミナーの講師を務め、年間1,000名を超える自衛隊員の皆様に私のセミナーを聞いて頂きました。

しかしながら、ライフプランは、ただライフプランの知識を学ぶだけでなく、実際に皆様がライフプランを創り、創られた皆様ご自身がその目標に向かって行動されなければ、その効果を享受することは出来ません。そこで、私は独立系のFPとして、一人でも多くの自衛隊員の皆様や自衛隊退職者の皆様に、中立の立場で皆様お一人お一人にあったライフプランをご提供すべく現在の会社に身を置く決心を致しました。そして、現在は、出身母体である航空自衛隊の基地を中心に活動していますが、出来る事ならば、航空自衛隊に限らず陸上・海上自衛隊の皆様にも等しくライフプラン・サービスをご提供させて頂きたいと考えています。

3　ライフプランの目的と効用



さて、ここで、私が万人にとって役に立つと信じているライフプランの考え方についてご紹介したいと思います。

まず、ライフプランを創る目的は、夢を叶え不安を軽減することです。

そして、ライフプランの効用は、次の四つのステップ

を通して、将来の姿を目に見える形で具体的にお示し、夢を叶えるための準備と万が一の事態に備えた対策を講じることにより、何となく思い描いていただけの夢を一つずつ確実に実現させ、漠然と抱いていた不安を軽減させることにあります。

① ライフイベント

まず初めに、漠然と思い描いていた自分の夢等を年表形式で表したライフプランの基礎となるライフイベント表を作成します。例えば、お子様のご結婚やご出産、ご自宅の新築や改築、海外旅行等のライフイベントを記入していきます。

ライフイベント表

経過年数		0	1	2	3	4	5	6	7
年齢	夫	53	54	55	56	57	58	59	60
	妻	51	52	53	54	55	56	57	58
	長男	23	24	25	26	27	28	29	30
	長女	21	22	23	24	25	26	27	28
ライフイベント	夫婦		定年退官 再就職		海外旅行	車更新		自宅改築	退職
	長男						結婚		
	長女		就職			結婚		出産	

② キャッシュフロー

次に、ライフイベントを基に家計の収支を見積もったキャッシュフロー表を作成します。このキャッシュフロー表は、1年を単位として収入の部、支出の部、年間収支、金融資産残高で構成されています。そして、収入合計額（X）から支出合計額（Y）を引いたものが年間収支額（Z）になります。また、その年の金融資産残高（B）は、前年の金融資産残高（A）にその年の年間収支額（Z）を加えて求めます。

この様に、将来の収支を具体的に一覧表にすることによって、年間収支額と金融資産残高の推移をはっきりさせることにより、早めに資金を準備したり、計画の変更をしたりすることにより漠然としていた夢を実現させることが可能となるのです。

キャッシュフロー表

経過年数		0	1	2	3	4	5	6	7
年齢	夫	53	54	55	56	57	58	59	60
	妻	51	52	53	54	55	56	57	58
	長男	23	24	25	26	27	28	29	30
	長女	21	22	23	24	25	26	27	28
収入	給与								
	年金								
	その他								
	収入計		X						
支出	生活費								
	住宅費								
	ローン返済								
	支払保険料								
	子供関連費								
	税・社会保険料								
	その他								
	支出計		Y						
年間収支			Z						
金融資産残高		A	B						

Z=X−Y

B=A+Z

③ バランスシート

ある時点での家計の資産と負債を一表にしたものをバランスシートと言います。この表を用いて、資産に対して負債が多すぎないか、保有している資産に偏りがないか等を分析して、必要に応じた改善を図ります。

例えば、退職金により住宅ローンの繰上げ返済をする場合としない場合の違いや、退職金の運用がハイリスクの資産に必要以上に偏っていないか等を安全性の観点から判断することができます。

この表で、資産合計から負債合計を差し引いた額を純資産と言いますが、純資産の額がその方の家計の本当の豊かさを表しています。

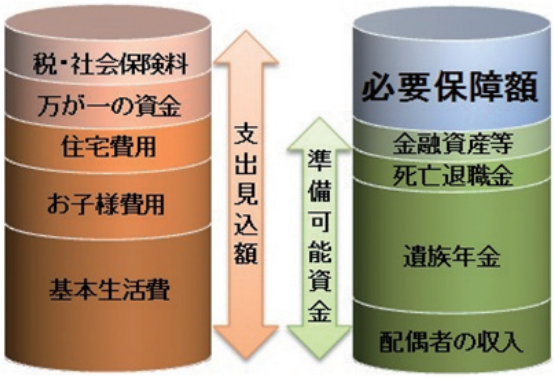
バランスシート　単位：万円

資産			負債		
金融資産	預貯金	300	借入金	住宅ローン	1,000
	株式	20		カードローン	0
	債券	150		その他	0
	投資信託	30	負債合計(B)		1,000
	その他	0			
保険の解約返戻金	生命保険	500	純資産		
	個人年金	0	A−B		2,500
	その他	0			
不動産	土地	0			
	家屋 マンション	2,500			
資産合計(A)		3,500	負債・純資産合計		3,500

④ リスクヘッジ

最後のステップは、万が一の事態を想定し、保険等を活用したリスクヘッジを考える段階になります。

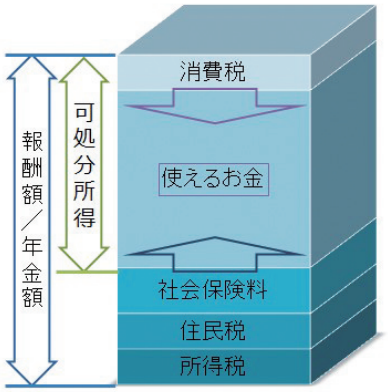
なぜリスクヘッジが最後のステップなのかと言いますと、キャッシュフロー表から残されたご遺族の基本生活費、お子様の教育費等の支出（支出見込額）を推測することが出来るようになり、その額から遺族年金等の予測可能な資金（準備可能資金）を差し引くことによって初めて生命保険等で補てん、即ち契約すべき死亡保障の額（必要保障額）を知ることが可能となるからです。



4 今正にライフプランが必要な時代に

近年、給与所得者の報酬は減る一方で中々明るい兆しが見えません。また、老齢年金の額も減り続け、社会保険料はじわじわと値上がりしております。そのため、収入

から税金と社会保険料を差し引いた可処分所得（いわゆる手取額）は、年々減少しております。更に、これらに追い打ちをかけるように来年4月からは消費税が5%から8%に上げられますので、我々が実際に使えるお金が年々目減りしていく状況にあります。



同様に、現職の自衛隊員を廻る環境も決して明るいものではありません。自衛隊員も一般の国家公務員と同様に給与の減額措置や退職手当の支給水準引き下げ等の影響を受けています。更に、従来60歳から支給されていた特別支給の退職共済年金の支給開始年齢も、2013年度からは、3年に1歳ずつ引き上がり、2025年度には65歳にならないと退職共済年金は支給されません。その一方で、自衛隊の特殊性から、任期制や若年定年制を採用せざるを得ず、多くの自衛官は、53～56歳で定年を迎えているのが現況です。

このような時代には、長期的な人生設計に基づいて、無駄を省き、限られた資金を有効に活用するライフプランが必要不可欠です。特に、若年定年制の自衛官の皆様にとっては、一般社会人にも増してライフプランを真剣に考えることが極めて重要です。人より早く確りとした人生設計を立て、人より多くの工夫を家計に凝らすことによって、大きな違いが生じる時代になっています。今正にライフプランが求められているのです。

5　ライフプランを通じで自衛隊に恩返し

さて、今までに私がライフプランを通じて、如何に自衛隊の皆様に恩返しをさせて頂いてきたかを実際にご提供した事例を通してご紹介したいと思います。

①キャッシュフロー・シュミレーションから将来の安心をご提供

退職を控えた自衛官の方が、セカンドライフ・プランニングのご相談に見えました。お聞きすると、末のお子様が小学生で今後の教育費の負担を考えると家計の収支が心配だとのことでした。早速、キャッシュフロー・シュミレーションを実施したところ、退職金等を含めた金融資産の範囲内で何とか乗り切れることを資料に基づきご説明し、一安心して頂きました。と同時に、今後は、金融資産を無駄なく有効に活用されることをアドバイスして終身保険を資産運用に活用することをお勧めしました。

②バランスシート分析から老後資産の安全性を確保

自衛隊を退職された方から、ライフプランのご相談をお受けすることも少なくありません。この様なケースで目立つのが、退職金等の資産運用面で偏りがあることです。過去に資産の5割以上を株式に投資されていた方や、資産の7割ほどを投資信託に投資されていた方もおられました。このようなケースでは、先に述べましたバランスシート分析を通じて、資産の内訳をお示しするとともに、年齢に応じて適切な割合になるように資産を再配分されることをお勧めしています。お心当たりのある方は、金融商品を販売していない独立系FPの私に是非一度ご相談ください。

③必要保障額のご提示から生命保険の見直しをご提案

多くの皆様は、ご自身の具体的な必要保障額（生命保険等で契約すべき保険金額）をご存じありません。また、必要保障額は、家族構成の変化や家族の成長と共に変化することも余り知られていません。したがいまして、ライフプランのご相談に見える方の中には、先に述べましたリスクヘッジの手法を通じて、必要保障額をお示しして、小まめに保険を見直すことをお勧めしています。このケースでは、初めに述べました通り私がFPになって実際に私自身が体験したもので、独立系FPとして真骨頂を発揮できる分野です。

さて、私がご提供させて頂いた事例を幾つかご紹介しましたが、お蔭様で、この様なライフプランのご提案をさせて頂いた皆様からは、大変ご好評を頂いており、多くの方はもっと早くに相談しておけば良かったとの感想を述べられています。このような皆様の声を聴くと、FPとして活動することの喜びと、遣り甲斐を強く感じているところです。

これからも、人生の大半を過ごさせて頂いた自衛隊に恩返しをすべく、一人でも多くの自衛隊員や自衛隊退職者の皆様に夢と安心をお届けするFPとして、命を懸けて務めて参る覚悟です。私の人生最後の仕事として……。

覚　　悟

一般幹部候補生　陸曹長
久保　翔平

防衛大学校本科第57期生を代表して、陸上自衛隊幹部候補生学校第94期一般幹部候補生（BU）課程　久保候補生が代表して御挨拶申し上げます。

月日が流れるのは早いもので、私達57期生が防衛大学校を卒業してからおよそ半年が経ち、ここ幹部候補生学校での生活も残すところ2ヶ月となりました。入校してからの半年を振り返ると、日常生活はもちろんのこと、駐屯地開校記念、四度の野営訓練、射撃検定や高良山登山走などまさに激動の日々でした。しかし、今、あらためて振り返ってみると、忙しい日々の中、自身の成長を感じることができる充実した毎日であったと言えると思います。
本稿では、幹部候補生学校での生活で、私自身が感じたことを書かせていただきたいと思います。

幹部候補生学校で我々、候補生が為すべきことは何か、それは「幹部自衛官となる覚悟を決める」ことであると思います。ここでいう「覚悟」とは、ただ単にこの学校を卒業し、普通科隊付教育を終え、3等陸尉の階級章を肩につけるという意味ではありません。幹部自衛官として相応しい人間になるという「覚悟を決める」ことです。そして、その「覚悟」に、より磨きをかけるために私が日々、自分自身に問いかけていることがあります。

その一つは、「自分のことは後に回しにして部隊のため、仲間のために尽くす覚悟はあるか」です。言うまでもなく、我々、陸上自衛隊は個人ではなく組織として任務を遂行することが求められています。幹部自衛官は、「幹」の字が表す通り、部隊の幹となり、陸曹・陸士を指揮する立場にあります。また、いざという時には、幹部が発する命令ひとつでそれに従う人々、更にはその人達の家族の人生を大きく左右することもあり得ます。そんな彼らを置いて、自分のことだけに集中する幹部に部下がついてこないのは自明の理です。我々、候補生は、将来、隊員のみならずその家族の人生までも背負うことを自覚して日々の生活を送らなければならないのです。

日頃の営内生活や野営訓練は、そのことを学び、実践するための場だと思っております。我々は現在、30名程度からなる「区隊」を基本単位として勉学・訓練に励んでおります。我々が背負う責任の重さの分、全うすべきことも多く、決して自分一人のことばかり考えて物事を進めていたのでは区隊としての任務は果たせません。特に、野営訓練は肉体的にも精神的にも日常に比して厳しい環境下で行われるため、「自分が追い詰められても区隊のため、隣にいる同期のために尽くす事ができるのか」ということが試されるとともに、本当の自分の弱さに向き合うことができます。「自分は追い詰められるとこんなにも自分本位な人間になってしまう」という現実を受け止め、自分の弱さを知るからこそ、日常の生活を無駄にすることなく、日々精進できるわけであります。

我々がここ、幹部候補生学校で経験する全てのことは、我々が幹部自衛官として部隊を指揮するその日のためにあります。我々がここ幹部候補生学校で流さなかった汗は、将来の部下の汗となり、血となります。その事を思うと、ここでの生活を一日たりとも無駄にはできないと思います。まだ、入校期間の三分の二を終えたにすぎませんが、以上のことが私なりに出した結論です。しかしその一方で、幹部となった時、果たしてその重責を果たせるかという将来に対する不安も感じています。おそらくこの不安は私だけではなく、多くの候補生が感じているものだと思いますが、そんな時、私を勇気づけてくれる言葉があります。「一燈を

提げて暗夜を行く。暗夜を憂うることなかれ。只、一燈を頼め。」これは江戸時代の儒学者、佐藤一斎先生の言葉で、「いかに道が暗かろうとも、自分の信念の灯を頼りに進め。」という意味です。これからの幹部候補生学校での生活、あるいは卒業後に幹部として過ごす日々、これからも多くの困難や不安にかられることもあると思います。しかし、そんな時は、自分がここで修練を重ね、力をつけることが、将来の部下を助け、自衛隊を強くし、そして日本を強くするということを信じて、隣にいる同期達と切磋琢磨して精進していきたいと思います。

防衛大学校の後輩の皆さんへ

「今」を大切にしてください。4学年は幹部候補生学校への入校、また、3学年以下も任官した後の自分の将来を不安に思うことがあるかと思います。しかし、防衛大学校で学んだ事は決して無駄にはなりません。学生舎生活、長期勤務学生としての勤務、様々な行事の責任者など、それらを通じて学ぶ事はたくさんあります。「今」を楽しみ、苦しみ、努力し、充実させて、一日一日を大切にしてください。毎日を一生懸命に過ごせば何か掴めるはずです。

最後に、防衛大学校の更なるご発展をお祈り申し上げて、拙文の結びとさせていただきます。

やせ我慢

一般幹部候補生　海曹長
第6分隊
柗村　駿明

防衛大学校57期期生会代議員（海）を勤めさせて頂いております柗村候補生がこの度は海上自衛隊幹部候補生学校学生を代表してご挨拶を申し上げます。はじめに、防衛大学校在学時には同窓会からの多大なるご支援を賜りましたことを、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

さて、私たちが防大を卒業し小原台から江田島へ舞台を移してから、早くも半年が過ぎようとしております。ここ海上自衛隊幹部候補生学校では、将来の海上自衛隊を背負って立つ幹部自衛官となるために、勉学・訓練に勤しむ毎日です。今回は、私がこの幹部候補生学校で学び得たことを紹介させていただくことで、全国各地の部隊でご活躍されております諸先輩の方々へのご挨拶並びに防大58期生以下の後輩諸君へのメッセージとさせていただきます。

本校は戦前から続く海軍兵学校の伝統を引き継ぐ教育機関であり、およそ120年以上の歴史の上に成り立っています。その理念は、積極果敢、指導力に富み、豊かな特性を具備した有為な幹部たりうる基礎を確立するため、教育、体育及び技能教育の均衡のとれた教育の中で、幹部自衛官としての資質を養うとともに、初級幹部自衛官として必要な基礎的知識及び技能を習得することにあります。今年の3月17日に着校した際、優美かつ壮大な「赤レンガ」を見た時の感動は今でも鮮明に覚えています。これまで数多くの偉大なる先人の方々を輩出してきたこの場所で、私のような若輩者が教育を受けてもよいのだろうかと、思い悩む時期もありました。それだけこの学校には、戦前から日本の為に戦い命を捧げてきた旧海軍軍人の方々、戦後の海上自衛隊の基盤を構築してきた方々、現在の海上自衛隊を支えている方々等、様々な人達の想いが詰め込まれています。

そんな伝統あるこの学校で私が最初に学んだことは「やせ我慢」の精神でした。防衛大学校学生時代も勉学・校友会・学生舎生活の3本柱の下で、日々忙しい生活を送ってきましたが、幹部候補生学校ではさらに忙しい毎日を過ごすことになります。朝の「総員起床」から体操・甲板掃除と立て続けに行われ、朝食を速やかにとって課業整列へと向かいます。課業も午前、午後、にびっしりと組まれており、夜も自習時間に勉学を勤しむ日々の中で、どうにか時間を作為してプレスやベットメイクをこなしていきます。そして赤鬼・青鬼と呼ばれる2人の幹

事付による厳しい指導も受け、呼び出しに応じる学生が学生隊本部前に行列を作る光景も珍しいものではありません。こうした厳しい生活を送る中で、冷静な判断を失い、つい自分本位な行動をとってしまう学生も現れてきます。窮屈な生活に根をあげて退職していく学生も見てきました。

しかし、私たちが将来背負うべき任務は、想像を絶する悪条件の中で、日本の国家国民のために為すべき事を為すというものです。有事の際においては、私たちの想像を遙かに超える事態が次々に生起し、その中で冷静な判断を下せるかどうかに事態の結末が大きく左右されます。この学校での厳しい生活や指導の延長線上には、上述したような場面に直面した際の対処力・判断力の醸成があるのです。そのためにも私たちはこの学校で「やせ我慢」の精神を持たなければならないことを学びました。きつい時や苦しい時に人間は本性を曝け出してしまいます。そうした中で自分勝手な行動を取るのではなく、組織のために行動することができるかどうか。ここではそれが試されているのだと思います。

また、幹部候補生学校には防大卒業生（1課程）だけでなく、一般大学出身の学生（2課程）もいます。防大の後輩諸君にはあまり馴染みがないとは思いますが、彼らは防大生とは異なった価値観や考え方を持っており、着校当初は何かと戸惑うかもしれません。しかし、彼らは海上自衛隊に対する高い意識と決意を持って幹部候補生学校の門をくぐって来ています。そして、その異なった価値観や考え方から防大出身の1課程が学ぶべきことも多く、互いに切磋琢磨していけるかけがえのない同期となります。厳しい幹部候補生学校の生活をここまで述べてきましたが、後輩諸君はこのような新しい仲間と出会える喜びもあるということを覚えておいてください。

最後にはなりますが、私たちを支えてきて下さった防衛大学校教職員をはじめとする防大関係者、諸先輩方、陸上自衛隊・航空自衛隊の道に進んでいった同期生、後輩諸君の皆様、本当にありがとうございました。長い間受けた恩情に報いるためにも、私たち一同これからも全力で物事に取り組んでいきますので、今後とも温かくも厳しいご指導をよろしくお願いいたします。皆様の更なるご発展を祈念して私のご挨拶とさせていただきます。

幹部候補生学校に入校して

一般幹部候補生　空曹長
大籔　秀斗

全国各地の諸先輩方、同期生及び後輩の皆様、日々の任務においてご活躍中のことと存じます。航空自衛隊幹部候補生学校の卒業を目の前に控えた今、学生を代表いたしまして、大籔候補生がご挨拶申し上げます。「小原台だより」に掲載されるということで、ここでは自身が幹部候補生学校で学んだことと、後輩である防衛大学校学生に向けたメッセージを送りたいと思います。

幹部候補生学校で生活する中で、常に指導され自身も心掛けていたことは、部隊の「規律」、「士気」、「団結」をいかに高めるかです。課程生活の中においては、特に当直学生や各係学生について隊を指揮する際に留意しなければなりません。航空自衛隊幹部候補生学校には、陸及び海の幹部候補生学校や防衛大学校と違い、学生長のような制度はありません。その時々の代表学生、当直学生及び各係学生等が隊の指揮を執るといった形です。このため、すべての候補生が均等に機会を与えられ、指揮活動を実践し、学ぶことができます。裏を返せば、すべての候補生が確実に指揮を執れなければならないという環境にあります。指揮を執る際に大切なことは、隊の「規律」、「士気」、「団結」をいかに高めるかということです。自分の指揮している隊がどのような状況にあるのかを適切に判断し、適切な指示や命令を行わなければならないからです。実際に、指揮官の指揮一つで、隊の威容や雰囲気、行動までもが大きく変わります。これは、実際の部隊においても同じことではないかと考えています。基本的ではありますが、この「規律」、「士気」、「団結」をいかに高めるかは、部隊を率いていく上で必須の留意事項であり、卒業後も常に意識していきたいと考えています。目指すべき幹部像は、優れた統御及び管理を基盤とした高い指揮能力を有する者です。崇高な任務を担っているため、多少の経験や知識では通用しません。防衛大学校時から将来を見据え、少しでも考えておいた方がよいと考えます。

もう一つ、幹部候補生学校に入校して重要であると感じたことは、机上で学んだことを実際の行動に移すことです。防衛大学校では、防衛学や服務教育等はあるものの、ほとんどが学科毎の専門的な分野を学習していると思います。しかし、幹部候補生学校では、航空自衛隊の基礎知識とともに、服務指導法や指揮及び幕僚活動といったことを知識として得ることができます。これらは、知識の涵養というよりは、むしろ普段の生活や今後の活動に直結するものであると感じます。課程生活においては「自ら考え、判断し、行動する」ことが求められます。ここで学んだ知識や技能を確実に自分のものとし、自身の指揮活動等において実践する必要があります。実際、頭では理解していても、なかなか行動にすることは難しいものです。幹部候補生学校においては、代表学生、当直学生及び各係学生等で指揮を執る機会が多くありますが、自らが何かを得ようとしなければ何も得ることはできません。このような機会を無駄にするのではなく、得た知識を活用しようとする意識や、何かを得ようとする心構えが非常に重要です。幹部候補生学校の6ヶ月間を無為に過ごすことがないよう、防衛大学校のうちから、幹部候補生学校での生活のイメージを持って意識を高めてほしいと思います。

以上2点述べましたが、最終的に自分を成長させることができるのは「自分」です。誰かに頼るのではなく、自分の納得がいくように物事に打ち込むことが重要であると考えます。防衛大学校においても、自分の納得がいくような生活を送るようにしてください。

防衛大学校留学生のホストファミリー募集案内

－留学生の日本のお父さん、お母さんになってみませんか－

防衛大学校では、昭和33年のタイ王国からの留学生を皮切りに、これまで11カ国（主として東南アジア諸国）350名以上の長期留学生を本科学生として受け入れてきました。現在も日本語留学生（本科学生の前段階として1年間の日本語研修生）を含め、9カ国から103名が在学中です。留学生は、日本人学生と同様に寮生活であるため、一般市民との交流及び一般家庭の生活を体験する機会が限られています。そのため、平成元年から日本の伝統、文化、生活習慣等を幅広く理解し、日本での留学がより有意義なものとなること、さらに、両国の友好親善のさらなる発展の一助となることを目的にホストファミリー制度（正式名称：留学生協力家庭制度）が開始されました。現在、48家庭がホストファミリーとして活動され、防衛大学校同窓生も6家庭が参加されています。また、近年では、米、豪、仏国からの交換留学生（約4カ月）も受け入れており、防衛大学校同窓生4家庭を含む6家庭がホストファミリーとして活動されています。

留学生との交流は、週末の外出や長期休暇の際に留学生がホストファミリーのお宅を訪問して行われており、ホストファミリーの方々を「日本のお父さん、お母さん」と呼び慕っているそうです。現在まで、ホストファミリィーとの交流を通じ、各留学生は日本に関する理解と知識を深め、知日家、親日家として防衛大学校を巣立っています。

防衛大学校は留学生が今後さらに増加することに鑑み、ホストファミリーを募っています。防衛大学校同窓会もこのホストファミリー募集に協力することとなり、広く同窓生の皆さんに将来各国の軍の中枢を担う留学生に日本の生活等を紹介していただける方を募集いたしますので、ご協力をお願いいたします。ホストファミリーに関します細部は、以下のとおりです。ホストファミリーご希望の方、若しくは、更に詳細を確認したい方は防衛大学校同窓会本部へご一報（TEL, FAX：03-3351-8910　E-mail:honnbu@bodaidsk.com）下さい。担当から改めてご連絡を取らせていただきます。

1　ホストファミリーと防衛大学校との関係

ホストファミリーは、当該制度の趣旨に賛同された方を防衛大学校長が委嘱し、ボランティアとして行っていただいています。防衛大学校とは、1対1の関係であり、防衛大学校がホストファミリーによる団体の結成やホストファミリーが実施する行事等を統制していません。

2　ホストファミリーの条件

⑴留学生と知人（若しくは友人等）としての付き合いを継続する意思があり、日常生活の案内や日本の理解のための支援をしてくださること。
⑵国籍、人種、宗教等の差別がないこと。
⑶同居家族全員のご賛同が得られていること。
⑷防衛大学校から片道2時間程度の移動圏内に居住されていること。

3　ホストファミリーの任期

原則毎年4月から1年間とされています。各年度末に防衛大学校から継続の確認が行われ、辞退の申し出がなければ継続されています。

4　その他

⑴留学生は各国の将来を担う人材であり、防衛大学校同窓会としてはホストファミリー希望者が同窓生であることを確認の後、防衛大学校に連絡いたしますので、第一報は防衛大学校同窓会本部へお願いします。
⑵平成25年9月現在、タイ、インドネシア、韓国、フィリピン、ベトナム、モンゴル、カンボジア、東ティモール、ラオスからの留学生が在校しています。防衛大学校は、ホストファミリー希望者と事前に受け入れ可能人数等を確認ののち、留学生を紹介しています。

ホストファミリーとの交流を振り返って

ベトナム社会主義共和国留学生
ブイヴァン・バオ

まずはじめにベトナム留学生及び留学全般について簡単に紹介します。ベトナム留学生は本科15名、研究科10名の計25名が防大に在籍し、両国の懸け橋たるべく勉学等に励んでおります。

次にホストファミリーとの交流について紹介します。私たち留学生はホストファミリーとの交流を通して、日本の文化・伝統・生活習慣を体験・理解するため、週末や休暇時にホストファミリーのご家庭を訪問させて頂いています。

私にとってホストファミリーのご家庭を訪問させてもらうことは素晴らしい経験であり、学生舎での生活とは大きく異なります。私はホストファミリーから日本の文化・風習をたくさん学びました。学校で教わっても分からないこと、教科書に書かれていないこともたくさんありました。例えば、春のお花見、夏の花火大会、冬のお正月等です。これらイベントに一緒に参加させて頂くことで、ベトナム文化との違いを認識し、互いの文化に敬意を持つことができました。またホストファミリーから様々なお話を聞くことで私の日本語も大きく改善されました。 更にご家庭での美味しい食事は非常に楽しみなものです。私にとって、ホストファミリーのご家庭は本国の実家と同じくリラックスできる場所になりました。長いようでとても短かった約5年間の留学を振り返り、私たち留学生が日本や日本人について深く理解しようとするのであれば、ホストファミリーの家族と一緒に生活することが一番の方法だと思います。

最後にこの場を借りてホストファミリーの皆様へ感謝

の気持ちを伝えさせてもらいます。毎年大変お世話になっております。家族と遠く離れた私たちにとってホストファミリーとの交流は非常に貴重な経験です。皆さまのお蔭で日本での生活が充実したものとなり、安心して勉学に集中することが出来ました。これからも宜しくお願いします。

協力家庭との交流

タイ王国留学生
メーターワット・タンマギット

日本で初めてのホストファミリー

私は日本に留学したばかりの頃、日本語や日本の文化などがよく分からなかった。最初は先輩達に教えてもらって、それからホストファミリーにいろいろと教えてもらった。防衛大学校で初めてホストファミリーに会った。私は国の友達と同じホストファミリーである。最初ホストファミリーに会った時に、本当に嬉しかった。その時に私はまだ日本語研修生なので、いろいろな日本語の言葉を教えてもらった。

ホストファミリーとの交流

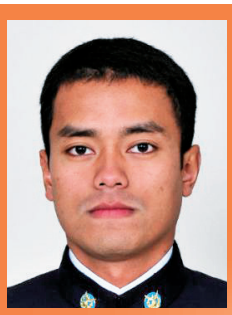
日本語研修生のとき、私はいつもホストファミリーの家に行っていた。特に夏休みと冬休みに何日もホストファミリーと過ごした。家に行った時にお母さんはいつも美味しい料理を作ってくれた。毎回お腹がいっぱいになった。日本語研修生の時に一番印象があったのはお正月であった。私はお正月に友達と一緒にホストファミリーの家に行って、餅を食べて、5時ぐらいに起きて、海まで行きホストファミリーと一緒に初日出を見た。本当にきれいであった。その後は近くの神社に初もうでに行った。そして家まで歩いて行って、家でお父さんと一緒に箱根駅伝を見た。本当に楽しかった。

1－4年生のとき、私は1年生の時になかなか忙しくて、あまり行かなかったが、3連休などがあったら、いつも行っていた。防大の1年生が平日にいろいろなことをして、けっこう疲れたので、ホストファミリーの家に行った時にいつもゆっくり休めて、本当に良かった。私は2,3年になって私服で外出できて、いつも友達と鎌倉まで行って、ホストファミリーと一緒に食事をしていた。私は友達とたまにホストファミリーの家で泊っていた。4年生になって、なかなか仕事が多くて、忙しいのであまり行かなかったが、3連休の時はいつも友達と一緒に行った。

ホストファミリーへの感謝

私は自分の国から遠いところまで離れ、両親に会えなくても、このような温かい家族と一緒に過ごして、私の寂しい気持ちがなくなりました。お母さんはいつも美味しい料理を作ってくれて、お父さんもいつも駅まで迎えてくれて、5年間いろいろとお世話になりました。お父さん、お母さん、本当にありがとうございました。私は防衛大学校から卒業しても、絶対このような温かい家族を忘れない。お父さん、お母さん、タイに行く時にはいつでも私を呼んでください。これからもよろしくお願いします。

お母さん



インドネシア共和国留学生
レザ・プラスティアワン

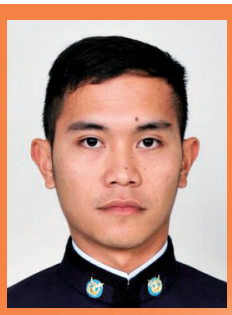
2009年4月1日防衛大学校に来校した。その時はまだ右も左もわからなくて、どうすれば良いのかもまだ分からない。その時、先輩が正門で迎えに来た。そして、色んな事を先輩から教えてもらった。時間が経ってどんどん防衛大の生活になれてきた。

5月末に、当時の2学年の先輩がホストーファミリと一緒に食事をしたいと言った。そしてその先輩が私を連れて行った。あるファミリレストランで待ち合わせをした。あそこでお母さんと初めて会った。最初に私は自己紹介をした。その後、お母さんと色んなことを話した。夏休みは一週間ほどお母さんの家に泊まった。その時お母さんと旅行した。私たちは箱根に行って、いい思い出になった。そして日本語もどんどん話せるようになって、お母さんと色々話せるようになった。家に行った時にいつも料理を作ってもらった。またお母さんからのアドバイスなどもたくさん教えてもらった。優しいお母さんで本当によかった。

お正月の時、いつも大家族が集まってきた。そのとき初めてお母さんの息子たちと孫たちに会うことができた。いつもお正月の前の晩はそばを食べた。そしてお正月の朝におせち料理を食べた。すごくおいしくてみんなで食べるときは一番楽しかった。そのあとお墓参りに行ったりした。本当にいい経験になった。

お母さんは優しくて、いつも「レザ、元気ですか」、ときどき、「今日は時間ありますか？一緒に食事しましょう」とメールが送られて来た。嬉しくて、自分の本当のお母さんのようにすごく優しい。お母さんが大好き。お母さんと出会ってよかった。

感　　謝



フィリピン共和国留学生
ステファン・デゴハス

日本のお父さんとお母さん「5年間ありがとうございました」という感謝の言葉でこの記事を書き始めたいと思う。

お父さんは私が日本語研修生の時に亡くなられた。そのため少しの時間しか一緒に過ごすことができなかったが、お父さんは日本に来たばかりで不安と希望を胸にしていた私にとても優しくしてくださった。

お父さんが亡くなられてからはお母さん一人となってしまったが私は多くの良い思い出を作ることができた。日本に来て最初にもらったカードはお母さんからの誕生日カードであった。ここで私はお母さんと同じ誕生日であることを知りこれも何かの縁であるのかと感じた。その後お母さんからは誕生日、クリスマス、季節の変わり目には体調を心配してくださる手紙をたくさん頂いた。休暇になりホームステイをさせて頂いた際には、一緒にお酒やビールを飲んだり、食事したり、映画などを見て、楽しい時間をお母さんと過ごした。またお母さんは会話の中から私の好む物や必要としている物を見つけていつも用意して下さる。私はこのような場面で日本人の細かい気づかいや思いやりという素晴らしい文化を身を持って知ることが出来た。ホームステイ先の方ではあるが本当のお母さんのように親身に面倒を見てくださり、私にとって第二の家族と呼べる方が日本にできたことを素晴らしく思うとともに心から感謝の念を感じる。日本政府及びフィリピン政府の今後の発展に尽力し、さらなる友好関係を築いて行けるよう願い、ここに感謝の言葉とする。

協力家庭の交流

カンボジア王国留学生
ロイ・ワンサック

私が日本に来て優しい協力家庭の方々と出合えたお話をしたいと思います。私は日本に留学する事が決まった時は本当に嬉しく感じましたが、実際に日本に来てみると自分が思っていた事とは全然違い、最初の一カ月間はものすごく寂しくて、実家や親の事を想って悩んでいました。逢いたくて帰りたくて泣いた日もありました。

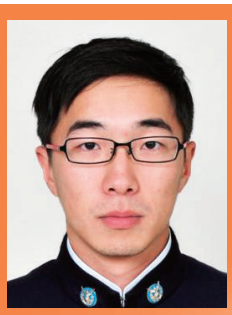
それでも日々生活を送るうちに悩みも少しずつ消えていき、さらに先輩から我々留学生は、日本人の方々が協力家庭となり、ホームステイさせてもらえることを聞きました。そして、その方々はどんな方かなぁ、自分の親みたいに優しく面倒をみてくれるかなと考えて楽しみにしながら、自分の日本語もまだ全然通じないのに、その方々に会う時にどういうコミュニケーションをとったらいいかなぁっと緊張していました。そして待ちに待った逢える日が来ました。協力家庭の方々は自分が思っていたよりすごく親切ですごく優しい方々でした。しかも、分かりやすい言葉で話してくれて本当に嬉しかったです。いつも、機会があるといつも協力家庭の方々の家に遊びに行っています。そして、私はその方々に自分の家族、趣味、防大生活、自分の国、自分の将来等の話を話しています。新しくできた協力家庭のお父さんとお母さんはすごく優しくしてくれます。

私の協力家庭のお母さんは家でお仕事をやっていてちょっと忙しいですが、たくさん一緒にお話をしてくれます。そして、ご飯を食べに行って色んなところに連れて行ってくれます。色んな所に行きながら沢山の日本文化も教えてもらいました。お母さんは話すことがものすごく上手です。お父さんはお母さんと違って人が沢山いる場所ではあまり話しませんが家の中ではお母さんとあまり変わらないです。お父さんもお仕事をやっています。仕事から帰る際に畑に寄ってお父さんが作っているキュウリ、トマト、キャベツ等をとってきてくれることがあります。その畑の野菜は外に売っている野菜みたいにいい形はしていませんが、味に関しては売っている野菜よりとっても美味しいです。

私たち留学生がお世話になっている協力家庭の方々は、それぞれ違い、皆は色んな過ごし方、経験、面白さがあると思います。私の場合でも、他の留学生でも全て素敵で優しい方々です。いつも面倒を見てくれて心から感謝します。私たちはお父さんとお父さんが大好きで一生忘れられないです。今まで本当にありがとうございます。

私も歳をとってからお父さんとお母さんのような機会があれば私も協力家庭になります。

Mさんと猫と私の交流



モンゴル国留学生
ナランオチル・トゥフシンバヤル

ホストファミリーとは、私達モンゴルの留学生を本当の家族として迎えてくださる方々のことである。特に私のホストファミリーのMさんはとても優しく、猫が大好きな方である。現在は息子さん1人と猫5匹と一緒に鎌倉に住んでいる。

日本に来てしばらくしてMさんのお宅に伺ったとき、五匹の猫が飼われていたことがわかった。ちなみに私は猫が大嫌いである。Mさん宅に初めて泊まったとき、何も考えずに部屋のドアを開放して寝ていたところ、朝目覚めたら顔が濡れていた。私の目の前には猫がいた。私はびっくりして反射的に猫を引き剥がした。そのようなことがあり私は猫が本当に嫌いになった。それからMさんのお宅に泊まる時はしっかりドアを閉めて寝るようになった。しかしこんな私でも次第に猫に慣れてきた。猫は意外にかわいい動物だとさえ思うようになってきた。最近は部屋のドアを開けて夜寝ることができるようになった。でもやっぱり犬の方が好きだ。

この様に猫と悪戦苦闘する私ではあるが、日本の文化もしっかり学んでいる。例えば、日本では正月には家族、親戚、近所の人々、その他大勢の人々が集まり、餅つき大会を行う。私にとって初めての体験であり、楽しそうな見た目とは裏腹に、実際に餅をつくのは大変な重労働だと知った。

これらの大切な思い出を作る機会を与えてくれたMさん達には今でも言葉に表せない程感謝している。モンゴルの後輩達も私と同じように日本の素晴らしい文化を学んでいくことができるようこれからもどうぞよろしくお願いいたします。

第12回防衛大学校同窓会囲碁大会（個人戦）結果

第12回防大同窓会囲碁大会（個人戦）は、平成25年9月15日（日）東京池袋サンシャインビル9F囲碁サロン「本因坊」に於いて、12名（現役学生3名を含む。）が参加し実施されました。

当日は、京都に大きな被害をもたらした台風18号通過前で生憎の雨模様でしたが、前日の団体戦に引き続き、個人戦4回戦の熱戦が行われました。

大会は星の潰し合いとなり全勝者がなく、5名が3勝1敗となり、スイス方式により優勝は5期川上氏、準優勝7期松井氏、3位4期清水氏という結果になりました。また、今回は、前日の団体戦にお手伝い頂いた現役棋道部員3名（4学年58期大友学生、光安学生、3学年59期村上学生）も参加されました。

次回は、団体戦平成26年9月6日（土）市ヶ谷日本棋院、個人戦同9月7日（日）場所（別示）の予定です。

なお、団体戦結果は、防衛大学校同窓会ホームページお知らせに掲示しています。（同窓会事務局：囲碁担当）

平成24年度防衛大学校同窓会決算書

平成25年3月31日現在
〔単位：円〕

区分		事業等			24年度予算額	24年度決算額	備考
一般事業	収入	会費			19,000,000	21,068,200	
		預貯金利息			2,500,000	188,327	24/2、30年国債→2年国債変更による減少
		雑収入			850,000	1,233,683	（代議員会の懇親会費を含む）
		収入合計（①）			22,350,000	22,490,210	
	支出	母校の充実・発展に寄与	1	新入生に対する講話	5,000	0	交通費は防大負担
			2	各種競技会支援	726,000	314,910	
			3	期生会発会等支援	300,000	360,029	
			4	学生の部隊実習支援	1,210,000	1,109,132	
			5	顕彰碑顕花式支援	350,000	223,490	
			6	開校祭支援	1,670,000	1,752,239	
			7	校友会対外活動支援	800,000	736,000	
			9	学術向上策支援	90,000	88,830	
			10	留学生学業基盤整備支援	220,000	220,000	
				小計（②）	5,371,000	4,804,630	
		会員相互の親睦交流	11	機関誌の発行	1,100,000	780,162	
			12	同窓会ホームページの運営	280,000	70,418	
			13	会員の慶弔業務	1,000,000	361,435	
			14	各種競技大会による交流	230,000	169,410	
			15	地域支部等への助成	550,000	340,000	
			16	卒業留学生との交流	230,000	210,210	
			17	HVD支援	320,000	325,468	36期生会
			18	HCD支援	350,000	337,070	14期生会
			19	講演会・懇親会の実施	3,220,000	3,588,243	明治記念館使用料・懇親会費、講演料
				小計（③）	7,280,000	6,182,416	
		社会活動への寄与	21	安全保障講座支援	100,000	100,105	
				小計（④）	100,000	100,105	
		会務運営基盤の充実	22	代議員会の実施	700,000	1,248,187	関東地区会員への案内のため通信印刷費増
			23	同窓会名簿の維持	50,000	58,980	
			24	期生会名簿の作成支援	120,000	94,470	12期・29期生会
			25	期生会等との連絡網の整備	0	0	
			26	期生会等のHP開設助成	60,000	1,360	
			27	地域支部等の設立支援	100,000	0	支部設立なし
			28	会費納入の促進	400,000	347,240	
				小計（⑤）	1,430,000	1,750,237	
		検討	29	法人化の検討	0	0	
			30	機関誌の発行のあり方検討	0	0	
			31	資産管理の在り方検討	500,000	0	
				小計（⑥）	500,000	0	
		維持管理		事務費	800,000	685,625	
				通信費	550,000	514,531	
				交通費	400,000	300,940	
				会議費	120,000	159,587	
				事務員費	1,300,000	1,321,680	
				事務局室賃貸費	2,800,000	2,789,828	
				小原台事務局運営費	100,000	53,779	
				小計（⑦）	6,070,000	5,825,970	
		支出計（⑧＝②＋③＋④＋⑤＋⑥＋⑦）			20,751,000	18,663,358	
		予備費（⑨）			1,599,000	0	
		支出合計（⑩＝⑧＋⑨）			22,350,000	18,663,358	
50周年記念事業	収入	積立金の取り崩し			11,300,000	10,911,675	
		収入合計（⑪）			11,300,000	10,911,675	
	支出	自体事業		「小原台だより」特集号発刊	1,000,000	680	
				歴代校長の式辞集作成	50,000	3,440	
				東日本大震災被災者支援	0	262,625	（計画外新規事業）
				予備費	250,000	61,310	「記念品寄贈」調整のための交通費
				小計（⑫）	1,300,000	328,055	
		地域支部支援事業		地域支部支援事業	0	0	
				小計（⑬）	0	0	
		母校支援事業		記念品の寄贈	10,000,000	10,583,620	
				小計（⑭）	10,000,000	10,583,620	
		支出合計（⑮＝⑫＋⑬＋⑭）			11,300,000	10,911,675	
収入総計（⑯＝①＋⑪）					33,650,000	33,401,885	
支出総計（⑰＝⑩＋⑮）					33,650,000	29,575,033	
実質的な積立金への繰り入れ額（⑳＝｛①＋⑪｝－｛⑩＋⑮｝－⑪）					-11,300,000	-7,084,823	

会 費 納 入 状 況

平成25年11月1日 現在

期別	会員数	完納者数	完納率%	未完納者数			
				陸	海	空	計
1	339	320	94.4	11	6	2	19
2	359	347	96.7	8	2	2	12
3	484	452	93.4	17	12	3	32
4	465	437	94.0	20	7	1	28
5	529	483	91.3	26	11	9	46
6	477	433	90.8	36	5	3	44
7	503	460	91.5	29	7	7	43
8	467	421	90.1	33	8	5	46
9	498	447	89.8	35	6	10	51
10	498	456	91.6	25	8	9	42
11	495	448	90.5	28	8	11	47
12	466	417	89.5	29	8	12	49
13	468	421	90.0	30	8	9	47
14	491	459	93.5	18	2	12	32
15	463	449	97.0	9	3	2	14
16	428	405	94.6	9	4	10	23
17	498	454	91.2	20	10	14	44
18	423	397	93.9	9	7	10	26
19	446	413	92.6	14	17	2	33
20	383	352	91.9	17	3	11	31
21	489	468	95.7	12	3	6	21
22	474	416	87.8	28	9	21	58
23	408	386	94.6	8	8	6	22
24	446	414	92.8	8	17	7	32
25	422	400	94.8	10	4	8	22
26	506	467	92.3	26	7	6	39
27	388	377	97.2	8	1	2	11
28	451	421	93.3	17	8	5	30
29	391	358	91.0	16	7	10	33

期別	会員数	完納者数	完納率%	未完納者数			
				陸	海	空	計
30	410	346	84.4	47	11	6	64
31	431	409	94.9	15	6	1	22
32	404	354	87.6	31	13	6	50
33	447	376	84.1	44	19	8	71
34	426	373	87.6	38	9	6	53
35	496	479	96.6	9	5	3	17
36	354	345	97.5	6	2	1	9
37	384	347	90.4	16	7	14	37
38	337	264	78.3	59	10	4	73
39	356	328	92.1	8	11	9	28
40	388	329	84.8	33	21	5	59
41	405	365	90.1	23	14	3	40
42	407	366	89.9	19	12	10	41
43	431	385	89.3	23	15	8	46
44	381	222	58.3	116	39	4	159
45	351	159	45.3	131	20	41	192
46	360	236	65.6	68	7	49	124
47	388	338	87.1	32	11	7	50
48	425	378	88.9	23	12	12	47
49	325	294	90.5	26	4	1	31
50	369	320	86.7	27	13	9	49
51	411	371	90.3	16	13	11	40
52	415	346	83.4	15	23	31	69
53	431	384	89.0	21	21	5	47
54	364	331	90.9	14	8	11	33
55	397	370	93.2	12	10	5	27
56	372	355	95.4	16	0	1	17
57	413	281	68.0	24	102	6	132

会員数の項：会費納入対象者(留学生を除く防大卒業者数)

会費納入のお願い

防衛大学校同窓会事務局長　**酒井　健**

昨年度は56期生のほぼ全員に完納いただき、今年度も新しく同窓会員になられた57期生の陸・空幹部候補生学校在校生・卒業生の皆様からはほとんど納入いただいております。衷心よりお礼申し上げます。

また、その他の期においても納入率向上のため、各期生会長及び代議員をはじめとする同窓会員の皆様にご助力をいただき、成果をあげております。重ねて御礼申し上げます。

同窓会事務局では、「会員相互の親睦並びに母校の発展及び社会的活動への寄与」という会の目的を達成するため、同窓会の経済的な基盤を更に固めるべく、18年度から幹部候補生学校等を訪問するなどして会費納入の促進に努めております。

同窓会活動の趣旨を理解して頂き、ぜひ会費未納の方（事務局で把握しておりますので下記連絡先にご確認下さい。）におかれましても、納入を宜しくお願い申し上げます。

【納入先】　ゆうちょ銀行
口座番号　00260 - 5 - □□24826（百万及び十万の桁は無記入）
加入者名　防衛大学校同窓会
通 信 欄　期別、要員別及び部隊名（現役の場合）を記入

【納入先】　三井住友銀行　飯田橋支店
口座番号　1270680
加入者名　防衛大学校同窓会　代表　藤枝　茂樹

なお、銀行振込の場合は、納入者の確認及び完納証等の発送のため、必ず振込者氏名、住所、期別、要員別、部隊名（現役の場合）振込期日をｅメール、Fax、電話等で下記にご連絡下さい。

【連絡先】
同窓会本部事務局：〒160-0003 東京都新宿区本塩町21－3－2
Tel/Fax：03-3351-8910
ｅメール：honbu@bodaidsk.com

【参　考】
普通会費
・防大本科卒業生
卒業時の３尉俸給月額（１号俸）の1／4（千円未満切捨）
・防大研究科卒業生（一般大学卒業者）（19年度改正）
卒業年度の３尉俸給月額（１号俸）の1／8（千円未満切捨）
延 滞 金　1,000円×(完納年度－３尉任官年度又は研究科卒業年度)
（防衛大学校同窓会会費に関する細則より）

会費算出例：45期生で過去に分納がない場合
普通会費 60,000円、完納年度 24年度、３尉任官年度 13年度(14.3)
24年度納入額 60,000円＋1,000円×(24－13)＝71,000円
（詳細は同窓会事務局までお問い合わせ下さい）

機関誌「小原台だより」投稿のお願い

平成25年度機関誌「小原台だより」は、ご投稿頂きました方々のお蔭で編集することが出来、この場を借りまして厚く御礼申し上げます。ご承知のように、「小原台だより」は、同窓会会員の皆様方からの投稿記事によって成り立っており、また、現役自衛官や退職自衛官等の様々な分野でご活躍の様子が、同窓会会員各位の啓発に役立っております。

「小原台だより」を益々充実発展させるためには、皆様方からの積極的な記事の投稿が望まれますので、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

平成26年度機関誌「小原台だより」の投稿要領は、次のとおりです。

投稿通知期間：**平成26年１月～６月**
メール（**jmk@bodaidsk.com**）、又は、電話（**03-3351-8910**）で

投稿締め切り：**平成26年10月15日（水）**

投 稿 文 書：Ａ４縦使用・横書きで、文字サイズ12Pとし、2,000文字（挿入写真の分を含む）を基準とし、投稿者の顔写真を添付

投 稿 方 法：メール（**jmk@bodaidsk.com**） 又は、CD等で。写真の郵送は可

機関誌担当：同窓会本部事務局広報部　　杉山　伸樹（23期・航空）

機関誌「小原台だより」の配布部数縮減に対する協力について

現在同窓会会員の皆様に配布しております機関誌「小原台だより」は、誌面の活性化等に関し皆様方の多大なご支援・ご協力のお陰をもちまして、今年度で既に第21号の発刊を迎えることができました。

既にご案内のとおり、皆様に冊子として配布しております「小原台だより」は、同時に防衛大学校同窓会ホームページ（以下「同窓会HP」という）（http://www.bodaidsk.com/）にPDFファイルとして閲覧できるようになっております。

現在、同窓会本部におきましては、経費の節約等により母校支援の強化を進めるため、「小原台だより」の同窓会HPでの閲覧を広く会員に推奨し、配布部数の縮減を推進しております。同窓会HPの閲覧により、「小原台だより」の配布部数縮減にご協力いただける方は、メール（**jmk@bodaidsk.com**） 又は、電話（**03-3351-8910**）で同窓会本部までご連絡いただけますようお願い申しあげます。

同窓会名簿管理に関するお知らせ

Ⅰ　名簿の維持管理

会員名簿は各種同窓会活動の基盤となるものであり、同窓会事務局としましては出来るだけ最新のデータの確保と厳正な維持管理に努めております。データの確保については、主として以下の要領で実施しておりますので、会員の皆様のご協力をお願い致します。

1　各期生会からの通知

個人情報保護法制定等を受け関係各所からのデータ収集が難しくなったことから、名簿の修正は、平成16年度から各期生会代議員に、平成19年度からは各期生会業務幹事に対して、例年8月の定期異動後にお願いしております。

平成21年度からは電子メールの活用を図り、期生会との連携の強化を図りつつデータの収集に努めさせて頂いております。

業務多忙にも拘らず担当して頂いた皆様、ご協力有難うございました。

2　会員個人からの通知

同窓会ホームページ上の「異動連絡」の項は、削除致しました。今後は同窓会事務局へ電子メール（ jinji@bodaidsk.com ）または電話等での連絡をお願いします。

Ⅱ　利用目的及びプライバシーポリシー

1　利用目的

次の目的で皆様の個人情報を利用又は提供します。

(1)　同窓会各種事業推進のための連絡
(2)　機関誌「小原台だより」の発送
(3)　会員の慶弔の実施
(4)　期生会、校友会、教務班等各種活動への協力
(5)　地域支部等への協力

2　プライバシーポリシー

以下のプライバシーポリシーに従い個人情報の適切な保護に努めております。

(1)　利用目的の範囲内で収集、管理します。
(2)　会員皆様の承諾なしに目的外の利用及び提供はしません。
(3)　会員の皆様が、個人情報の照会、修正、削除等を希望される場合は、速やかに対応します。（同窓会事務局人事部担当にご連絡下さい。）
(4)　個人情報へのアクセス、破壊、改ざん及び漏洩の無いように適切に管理します。

期生会会長・代議員名簿

平成25年11月30日現在

期	期生会会長		代議員			業務幹事	
	氏名	要員	陸：氏名	海：氏名	空：氏名	氏名	要員
1	中尾 時久	陸	高比 康之	高山 雅司	二宮 隆弘	宮本 直躬	陸
2	林 赳夫	海	吉田 暁路	石原 公夫	吉岡 一成	石原 公夫	海
3	野本 眞二	陸	小松 澤祐	手塚 正水	出口 哲夫	田邉 哲	陸
4	利渉 弘章	空	功力 勝介	櫻澤 清志	金子 晴一	山道 弘	陸
5	中村 雅嘉	空	辻川 健二	岩田 威	山田 秀次郎	浅野 勇蔵	陸
6	夏川 和也	海	池田 勝	杉本 光	松本 元吉	松本 元吉	空
7	宮本 敏明	陸	津村 秀一郎	高木 基博	大杉 祐司	後藤 淳一郎	海
8	廣崎 恪也	陸	松浦 紘之	永島 博	横山 俊夫	横山 俊夫	空
9	藤田 幸生	海	小島 捷利	津村 明邦	日高 久萬男	吉橋 誠	陸
10	中司 崇	空	嶋野 隆夫	坂東 勝昭	津金澤 洋實	津金澤 洋實	空
11	石川 亨	海	洞澤 佳廣	竹村 訓	赤羽 益三	阿保 文敏	陸
12	相田 哲彦	空	諏訪 浩	藤田 泰夫	橋本 康夫	橋本 康夫	空
13	山下 輝男	陸	篠田 芳明	新宮 領篁	花岡 芳孝	菅原 純	陸
14	斎藤 隆	海	小津 光由	斎藤 隆	稲葉 憲一	有井 一弘	空
15	林 直人	陸	佐伯 義則	平山 為祥	江口 啓三	佐藤 誠喜	陸
16	折木 良一	陸	石川 由喜夫	小豆野 実	鈴木 直人	石川 由喜夫	陸
17	赤星 慶治	海	廣瀬 誠	赤星 慶治	永田 久雄	石川 雅敏	海
18	外薗 健一朗	空	植木 美知男	岡本 正治	長尾 齊	笠原 久	空
19	酒井 健	陸	榊枝 宗男	武田 壽一	山川 龍夫	榊枝 宗男	陸
20	佐藤 貞夫	陸	西村 智聡	加藤 耕司	松原 準一	今井 惠治	陸
21	千葉 徳次郎	陸	渡邊 隆	佐々木 孝宣	山崎 剛美	荒川 龍一郎	陸
22	宮下 寿広	陸	小渕 信夫	山口 透	福井 正明	田上 安男	陸
23	岩本 豊一	陸	岩崎 親裕	細谷 正夫	若林 秀男	竹谷 修治	陸
24	原田 哲郎	海	武内 誠一	原田 哲郎	高橋 芳彦	武内 誠一	陸
25	高鹿 治雄	海	飯塚 稔	徳丸 伸一	吉田 浩介	大瀬戸 功	海
26	屋代 律夫	陸	小手川 敦	柴田 敬	佐々木 金也	高嶋 誠	空
27	小林 茂	陸	小林 茂	副島 尚志	丸茂 吉成	小林 茂	陸
28	田浦 正人	陸	田浦 正人	畠野 俊一	佐藤 雅俊	田浦 正人	陸
29	馬場 邦夫	陸	中村 浩之	中尾 剛久	長島 純	時藤 和夫	空
30	堀切 光彦	陸	山崎 繁	時久 寛司	竹平 哲也	山崎 繁	陸
31	前田 忠男	陸	石丸 威司	今村 靖弘	後藤 雅人	石丸 威司	陸
32	阿部 睦晴	空	池田 和典	梶元 大介	柴田 利明	植村 茂己	空
33	中塚 千陽	空	山根 寿一	真殿 知彦	沖野 克紀	沖野 克紀	空
34	佐藤 信知	空	大谷 勝司	大西 哲	小笠原 卓人	小笠原 卓人	空
35	稲月 秀正	空	戒田 重雄	伍賀 祥裕	吉村 一彦	熊谷 三郎	空
36	寺崎 隆行	陸	松永 浩二	石巻 義康	寺崎 隆行	松永 浩二	陸
37	宇佐美 和好	空	小川 隆宏	浦口 薫	宇佐美 和好	宇佐美 和好	空
38	石井 浩之	空	森本 康介	濱崎 真吾	霜田 豊英	山崎 武志	空
39	湯下 兼太郎	陸	湯下 兼太郎	平田 利幸	中川 一	湯下 兼太郎	陸
40	清水 徹	海	梨木 信吾	川野 邦彦	石引 大吾	兵庫 剛	陸
41	堤田 和幸	海	小林 貴	堤田 和幸	中谷 大輔	堤田 和幸	海
42	武田 和克	陸	武田 和克	中尾 喜洋	山口 嘉大	武田 和克	陸
43	鎌田 淳	空	澤 繁実	戸永 竜太	岩切 主税	岩切 主税	空
44	髙橋 秀典	海	青木 仁	阿部 直樹	原田 理	阿部 直樹	海
45	青山 佳史	陸	庄司 秀明	岡澤 智和	坂田 靖弘	庄司 秀明	陸
46	田村 弘範	海	石岡 直樹	近藤 太郎	寺林 洋平	近藤 太郎	海
47	吉水 憲太郎	陸	清田 裕幸	笠原 健治	中里 悠花	清田 裕幸	陸
48	和田 嵩一	海	桐谷 高弘	柏木 祐一郎	齋藤 真吾	柏木 祐一郎	海
49	山上 剛史	空	納谷 知希	小沼 洋祐	山上 剛史	山上 剛史	空
50	吉井 拓也	陸	益田 一宇	八木 佑己	阿部 竹浩	益田 一宇	陸
51	鬼塚 勇	陸	鬼塚 勇	林 大佑	森嶋 倫	鬼塚 勇	陸
52	成田 優	陸	成田 優	小谷 経三郎	荒木 敬	成田 優	陸
53	濵田 卓	空				濵田 卓	空
54	金澤 慧人	空				金澤 慧人	空
55	若月 豪	陸				若月 豪	陸
56	松尾 聡一郎	陸	松尾 聡一郎	中川 結貴	舟津 貴正		
57	我妻 国明	陸	久保 翔平	松村 駿明	大藪 秀斗		

同窓会本部・支部等の役員紹介

平成25年11月１日現在

平成25年度同窓会本部役員

会長	永岩 俊道	15	空
副会長	折木 良一	16	陸
副会長	赤星 慶治	17	海
副会長	永田 久雄	17	空
副会長	岩崎 茂	19	空
理事兼事務局長	酒井 健	19	陸
理事	高嶋 博視	19	海
理事	菊川 忠継	18	空
理事	野口 泰明	16	海
理事	荒木 淳一	27	空
理事	上尾 秀樹	29	陸
理事	道満 誠一	26	海
理事	荒木 文博	28	空
会計監事	瓦谷 育夫	15	陸
会計幹事	岩城 誠	15	海
会計幹事	持田 清久	17	海
会計監事	戸田 友敬	20	空

総務部長	鎌田 正広	21	陸
総務部長補佐	湯元 正義	21	海
総務部長補佐	福盛 裕一	22	陸
総務部	藤井 貞文	23	陸
総務部	山下 俊司	22	空
総務部	大津 雅紀	23	海
人事部長	冬木 義雄	21	空
人事部長補佐	吉永 春雄	22	陸
人事部長補佐	岩田 高明	22	海
人事部	福島 司	23	陸
人事部	宮本 泰夫	23	空
広報部長	飯田 克幸	21	空
広報部長補佐 機関誌	森本 澄男	22	陸
広報部長補佐 HP等	末次富美雄	22	海
広報部 機関誌	杉山 伸樹	23	空
広報部 HP/MCI	永岩 一郎	23	海
広報部技術指導	村田 和美	17	陸
経理部長	藤枝 茂樹	21	陸
経理部長補佐	道 憲之	22	空
経理部	佐々木俊也	23	海

事業部長	日笠玲治郎	21	陸
事業部長補佐	金子 吉宏	21	海
事業部 ゴルフ・講演	山田 聡	22	陸
事業部 ゴルフ・講演	神田 正晴	23	空
事業部 HCD/HVD	島田 正登	22	海
事業部 HCD/HVD	早坂 正	23	空
事業部 囲碁・留学生	北村 義明	22	陸
事業部 囲碁・留学生	渡邊 一弘	23	陸
事業部 テニス・助成	泉 賢一	22	空
事業部 テニス・助成	渡邊 俊一	23	陸
小原台事務局長	武藤 茂樹	28	空
小原台事務局長補佐	輿儀 孝	34	空
小原台事務局長補佐	岩田 忠久	28	空
小原台事務局長補佐	内田 貴司	28	空
事務局員	野村 佳正	29	陸
事務局員	中澤 信一	28	海
事務局員	吉野 順也	33	陸
事務局員	井手 達也	36	海
事務局員	小川 健一	37	陸
事務局員	妹尾 研作	41	陸
事務局員	秋山 純一	42	陸
事務局員	原野 博文	45	空

平成25年11月30日現在

地域支部等役員

北海道地域支部	支部長	穴口 一男	9	陸
	事務局長	前田貞一郎	30	陸
東北地域支部	支部長	吉川 洋利	14	陸
	業務幹事	原田 富雄	17	陸
栃木地区支部	支部長	大内 伸浩	10	陸
	理事兼事務局長	正岡富士夫	15	空
群馬地区支部	支部長	石橋 輝治	5	陸
	事務局長	小島 健二	14	空
北陸地区支部	支部長	濱谷 隆平	6	陸
	事務局長	西川 清	15	陸
東海地区支部	支部長	佐藤裕紀夫	12	空
	事務局長	木原 文雄	12	陸
関西地域支部	支部長	盛田 節生	13	空
	事務局長	新見 泰朗	17	陸
岡山地区支部	支部長	高橋 正憲	6	空
	業務幹事	永岑 富彦	10	陸
広島地区支部	支部長	加藤 紀夫	15	海
	事務局長	森田 寧	17	海

山口地区支部	支部長	高橋 佳嗣	11	陸
	事務局長	神田 和穂	14	陸
四国地域支部	支部長	青木 初年	9	空
	事務局長	松浦 孝昇	7	陸
徳島地区支部	支部長	青木 初年	9	空
	事務局長	清水 祥人	12	陸
香川地区支部	支部長	戸松 久忠	6	陸
	事務局長	松浦 孝昇	7	陸
高知地区支部	支部長	岡林 靖之	8	海
	事務局長	川田 公一	16	空
愛媛地区支部	支部長	赤岡 順	4	陸
	事務局長	瀬川紘一郎	10	海
九州地域支部	支部長	西村 長治	13	陸
	事務局長	松尾 隆二	15	陸
福岡地区支部	支部長	西村 長治	13	陸
	事務局長	松尾 隆二	15	陸
佐賀地区支部	支部長	森永 康則	13	海
	事務局長	福岡龍一郎	26	陸

長崎地区支部	支部長	新野 克洋	9	海
	事務局長	樋口八洲太郎	10	海
熊本地区支部	支部長	斉藤 四郎	9	陸
	事務局長	森 三千雄	10	陸
大分地区支部	支部長	亀井 重義	11	陸
	事務局長	工藤 和信	16	陸
宮崎地区支部	支部長	小森 四雄	12	陸
	事務局長	二宮 成一	14	陸
鹿児島地区支部	支部長	増田 克己	12	陸
	事務局長	兒玉健二郎	22	陸
沖縄地域支部	支部長	山縣 正明	14	陸
	事務局長	田口 佑二	47	空
小原台クラブ	支部長	岩崎 俊雄	9	陸
	事務局長	山田 耕平	40	空
桜華会	会長(支部長)	塚口 千枝	40	陸
	事務局長	吉田ゆかり	40	空

会　員　の　訃　報

平成24年12月11日から平成25年12月１日までに届いた会員の訃報を紹介します。
なお、詳細は防衛大学校同窓会ホームページでご覧下さい。

1期生
(陸)　平井　　進　平成24年　5月26日
　　倉薗　貞夫　平成24年　10月31日
　　中部　普行　平成25年　2月27日
　　渡邊　政直　平成25年　4月29日
　　林　　則行　平成25年　9月6日
　　新津　保義　平成25年　9月21日
(海)　宮川　正四　平成24年　6月1日
　　竹内誠一郎　平成25年　8月31日
(空)　吉澤　鶴久　平成24年　4月7日
　　石塚　鑛司　平成25年　4月30日

2期生
(陸)　高畑　活水　平成24年　12月6日
　　正木誠之助　平成25年　1月18日
　　馬渡　隼夫　平成25年　2月27日
　　横尾　康弘　平成25年　8月2日

3期生
(陸)　曽根崎博臣　平成24年　7月14日
　　岩瀬　六典　平成24年　12月18日
　　宇野　　曠　平成25年　7月17日
　　木山　　昇　平成25年　10月23日
(海)　諸泉　禎亮　平成25年　4月18日
(空)　松島　隆昭　平成25年　1月16日
　　立山　洋吉　平成25年　9月

4期生
(陸)　隈元　保雄　平成25年　2月21日
　　須原　　毅　平成25年　10月20日
(海)　井上　　哲　平成25年　11月15日
(空)　植木　浄雄　平成24年　12月8日
　　埜村　一郎　平成25年　12月1日

5期生
(陸)　佐野　和之　平成24年　12月13日
　　伊橋　　勇　平成24年　12月20日
　　千葉　瑞圓　平成25年　4月14日
　　松原　健一　平成25年　7月7日
　　土肥　光之　平成25年　7月18日
　　瀬山　博英　平成25年　9月9日
　　澤山　　隆　平成25年　10月9日
(海)　加藤　義勝　平成24年　12月3日
　　宝蔵寺久雄　平成25年　3月1日
　　小野　頼男　平成25年　4月29日
(空)　岡本　　久　平成24年　6月24日
　　伊集院和彦　平成25年　9月18日

6期生
(陸)　鈴木　克巳　平成25年　1月5日
　　埜倉　基義　平成25年　4月29日
　　池田　仁三　平成25年　5月23日
　　阿部　政雄　平成25年　5月31日
　　内藤　幸雄　平成25年　7月5日
(海)　谷　　徹彦　平成24年　12月16日

7期生
(陸)　中村　博澄　平成25年　1月5日
　　津村秀一郎　平成25年　11月6日
　　後田　寛孝　平成25年　11月7日
　　臼井小五郎　平成25年　11月16日
(海)　阿部　輝幸　平成25年　3月14日
　　白鳥　　剛　平成25年　4月14日
　　大川　　晃　平成25年　4月21日
　　林　　準三　平成25年　10月31日

8期生
(陸)　藤野　　憲　平成24年　12月5日
　　片山　一儀　平成24年　12月30日
　　保田　恵造　平成25年　5月30日
　　石橋　芳美　平成25年　6月1日
　　徳永　育郎　平成25年　6月29日
　　鍛治川　晃　平成25年　7月5日
(空)　柴山　忠嗣　平成25年　3月17日

9期生
(陸)　吉田　時信　平成25年　8月18日
(空)　小石　　眞　平成25年　1月12日
　　細川　博文　平成25年　4月6日

10期生
(海)　吉行　洋雄　平成25年　3月2日
(空)　松本　繁男　平成25年　11月6日

11期生
(陸)　平野　龍文　平成24年　12月12日
　　古川　隆興　平成25年　4月27日
　　中矢　卓志　平成25年　9月23日

12期生
(陸)　田川　睦夫　平成25年　9月18日
　　酒井　政和　平成25年　10月29日
(海)　歌田　順治　平成25年　8月7日

13期生
(海)　阿部　洋継　平成25年　8月1日
(空)　諸泉　禎亮　平成25年　4月18日
　　居蔵　弘一　平成25年　4月25日

14期生
(陸)　平井　久雄　平成24年　7月29日
(空)　高橋　直樹　平成25年　10月11日

15期生
(陸)　越前　　進　平成25年　1月10日
(空)　溝上　良一　平成25年　4月13日

17期生
(陸)　藤枝　　通　平成25年　2月8日
　　岡崎　栄一　平成25年　2月15日

18期生
(海)　岩崎　繁美　平成25年　11月2日

20期生
(海)　中村　泰信　平成25年　10月16日

21期生
(空)　杉野　隆久　平成25年　11月29日

23期生
(海)　中俣　郁夫　平成25年　2月14日

24期生
(海)　佐保田栄司　平成24年　12月21日

30期生
(陸)　黒澤　　晃　平成25年　5月3日

33期生
(陸)　岩尾　哲郎　平成25年　11月2日

43期生
(陸)　荒澤　育雄　平成25年　5月21日

編集：森本　澄男（22期・陸上）、杉山　伸樹（23期・航空）
印刷：㈱エイコープリント

第57期生　卒業式

防衛大学校同窓会本部連絡先

〒160-0003　東京都新宿区本塩町21-3-2
TEL・FAX　03-3351-8910
E/M: honbu@bodaidsk.com